

3211
138

東亞協會研究部編纂

國民生活と宗教

東京 弘道館發兌

324-130

東亞協會研究部編纂

國民生活と宗教

東京 弘道館發兌

明治
42 7 12
丙午

序

國民生活と宗教との關係は、學者の深く攻究を要する一大問題なり。而して特に我邦の現狀に就いて之を考察するに是れ必ず早晚解決せざるべからざる所に屬す。是を以て昨年三月二十三日東亞協會研究會を東京帝國大學構内山上御殿に開いて此問題を論議す。來會者約二十七人。皆此問題に就いて深大なる興味を有せるものなり。當時代るく立ちて述べたる見解は、悉く速記せしめて、之を編纂し、其他尙ほ二三の論文を増補し、合して一部の書となし、題して「國民生活と宗教」といふ。其内容たる、實に社會の重要問題に關

するを以て遂に書肆弘道館主人をして之を刊行せしむ。印刷已に成るに及んで、略、此書の來由を述べ、以て之が序となす。

明治四十二年六月二十五日

東亞協會々長 文學博士 井上哲次郎 識

→(2)←

國民生活と宗教 目次

文學博士 井上哲次郎氏

..... 一

研究會開會の辭

文學士 吉田熊次氏

..... 五

序 言

宗教に關する問題

佛教と基督教とが國民生活の上に如何なる影響を有するか

佛教の方如何

基督教の方如何

宗教信仰と國民及び國家

→(1)←

宗教の定義と其本質とに於ける諸家の説

○ 宗教は吾人の心意に如何なる關係を有するか

統一の二方面

宗教的信仰の精神活動に於ける長處と短處

結論

文學士 有馬祐政氏……………

三

○ 宗教とは何ぞや

國民生活とは何ぞや

歴史的考察

西洋の方面

東洋の方面

支那に於ては如何

宗教と文學

→(2)←

佛教の利用

▽ 日本に於ては如何

純然たる宗教

信仰は個人的なるべし

日本人は道德萬能主義なり

現世主義の國民

文學士 加藤玄智氏……………

六

、道德と宗教

道德實行の根柢

宗教と未來の觀念

宗教と國民生活

宗教と哲學

オウソリチーの進歩

→(5)←

カトリシズム

文學士 吉田熊次氏……………八五

加藤學士に答ふ

宗教と道德

文學士 加藤玄智氏……………九三

有馬吉田兩學士に答ふ

法學博士 浮田和民氏……………九五

宗教と哲學

宗教は國民生活の基礎

宗教と教育

文學博士 三宅雄二郎氏……………一〇三

浮田博士を駁す

→(4)←

宗教と國民の歴史

宗教にのみ頼るは情なし

神佛はありがたくなし

神佛は蟲虻蛄同様

法學博士 浮田和民氏……………一〇八

三宅博士に答ふ

文學士 吉田熊次氏……………一一一

三宅浮田兩博士に答ふ

三宅中島兩博士及び吉田文學士との問答……………一二四

文學博士 福來友吉氏……………一二九

物質的生命と精神的生命

宗教としての處世術の困難點

→(5)←

宗教の理想

實際的困難點

結論

文學博士 元良勇次郎氏……………一七四

如何なる宗教が最も我國民に適するか

國家の成立と宗教の成立

宗教と國家組織

基督教は宇宙的宗教なり

佛教は心理的宗教なり

神儒二教は國家的社會的宗教なり

將來の宗教

文學博士 井上哲次郎氏……………一八三

宗教と道德に對する新感

純道德と將來の宗教

道德の二方面及び宗教に代るべき純道德

純道德の根柢

結論

—(終り)—

國民生活と宗教

文學博士 井上哲次郎

今晚は國民生活と宗教といふ題を設けて之を研究する事にいたしました。之に就いて色々諸君の御議論が出て來る事であらうと考へます。就きましては先づ斯かる問題を研究することに致しました次第をチョツと述べて置きませう。國民生活と宗教との關係は廣く之を考へて見ましてもナカク學術上の問題として種々講究を要するのであります。殊に我日本に於ては此問題の研究が極めて重大であります。歐米諸國に在ては基督教の外に猶太教なども無いとは

ないけれ共それは宗教として大した勢力を有つて居りませぬので、
歐米諸國は一般に宗教と言へば基督教に依て律せられて居る有様で
あります。所が我日本は餘程歐米諸國と事情を異にして居ります。
元來佛教と云ふ大宗教が這入つて居りまして既に千年以上の歳月を
經て居ります。さう云ふ處からして我國民は餘程よく佛教に慣れて
居りますが、維新以來基督教の輸入と共に宗教に對する態度を確
定する事が必要となつて來ました。基督教の輸入といふ事は随分是
は我日本に取つては講究を要する問題であります。是は獨り基督教
に對するのみならず凡そ宗教といふことはどう云ふ事であるか。宗
教は如何様にすべきであるか。總て宗教に關する研究を促して來る
のであります。その中でも殊に國民生活と宗教との關係が實際問
題として最も重要になつて來る次第であります。歴史に據りまする
といふと宗教の爲に亡國となつた國もあります。又之に反して

宗教に依つて國運勃興した處もある様に思はれます。又宗教の爲に
大戦争をなして之が爲に國運の消長盛衰を免がれなかつた場合もあ
りまするので、宗教の國民生活に關係の有るといふ事はナカ／＼尋
常で無い。併ながら唯、宗教が國民生活に關係のあるといふことなら
ば是は單に歴史上の問題であります。それのみでは無い。實
際問題としては、宗教の國民生活に關係するのが果して國民生活の
上から見て有益であるか不利であるかどうか云ふものであるか。抑、如
何なる結果を來すものであるか。又宗教の性質如何に依つてはそれ
が大に違つて來るのであるかどうか。兎に角是は一般の學術
問題として趣味ある問題であります。そのみで無く我邦に在
つては此學術上の興味と實際上の興味とが一緒に結ばれて起つて來
るのであつて、ナカ／＼此問題に就ては多種多様の感想を喚起して
來るに相違ないと考へます。どうか此問題に就て諸君は腹藏なく充

分に御高説を御述べにならんことを希望いたすのであります。依て先づ此問題を研究問題として茲に出したその趣意を述べて議論の端緒を啓くことに致した次第であります。

文學士 吉田熊次

唯今東亞協會の會頭より御述になりました通り此度研究会を開くことになつたのであります。それは誠に私自身に於て愉快に感ずるので、斯う云ふ種類の研究会が何時か有つたら宜からうと以前から思つて居りましたのであります。私が佛蘭西の巴理に滞在いたしました際丁度之に類似の會がありました。それはユニオンブルーモラー即ち倫理協會とでも言うべきもので、年に二度研究会をやつて居つたのであります。此倫理協會は現今は例の倫理運動と連絡を有つて居ります。在來は獨立して居つたのであります。その會の議してをることにはナカ／＼重大なる問題である。死刑廢止の問題或は宗教分離問題などの際には政治家學者宗教家其他朝野知名の士

を一堂の下に集めまして有益なる研究を公けにし、以て此等の問題の解決に大なる貢献を爲したのであります。私が巴理に居りました時にも一回其會がありました。會主デジャルダン氏の招待に依り行きてその實況を見たのであります。其時は司法官養成の問題でありまして來會者は社會學者、歴史家、法學者、教育學者、辯護士、司法官等色々な人でありましたが、何れも知名の人で又其討論の有様は如何にも熱心で、各方面の人が力を盡して斯る實際問題に付て研究することの眞面目である事には感心をしたのであります。其會の研究のやり方を申しますと一人の人が話をするので無しに、多くの人が其問題に付ての意見を纏めて簡単に話をするのであります。斯う云ふ種類の會は日本にもあつたならば定めし世人の参考となりて有益なことであらうと思つて居つたのであります。所が丁度東亞協會の第二十三條に是に相當する條項が有るといふことで東亞協會

で以て先づそれをやらうと云ふ話が出来、有馬、尾上、葉山の三君と私とで實際どうやらうかといふやうな事を少し考へました結果遂に此會を見ることになつたのであります。この度の問題は私の専攻して居る事柄とは餘程縁の遠いのでありますから、自分が第一着に發言を求むると云ふ様なことには致さぬ考でありましたけれ共、元來巴理の倫理協會のやつて居る所を見ますと其趣意は専門家の意見を聴くと同時に多方面の人の意見を公平に集めるといふ事が主であるやうに感じましたから、假令私の専門外の事であるとしてもそれについて卑見を申上げることが本會の趣意に背く譯でも無からうと思ふ所から申上げる次第であります。皆さんに取りまして御迷惑とは思ひますが兎に角私は自分の考へて居る丈けを此問題に付て申上げて見たいと思ふのであります。

宗教に關する問題は日本に於て屢々討論に上つた問題である。會て

宗教と教育との關係がどうであるといふ論もあり、其後宗教と倫理とがどう云ふ關係を有つものであるかといふ事が大に喧ましい議論となつたのであります。故に今日再び宗教と國民生活との關係を論ずると云ふことは同じ問題を繰返すやうな事になる處がある様に見ゆるけれ共、私の考へます所では今晚の問題は從來の問題より餘程實際的であつてよい筈と思ふのであります。從來の教育と宗教との問題、宗教と倫理との問題の如きは主として學理的に取扱はれたのであります。私の希望する所は今晚の問題はより多く實際的に取扱はれて欲しいと思ふのであります。随つて此問題を再び提出するとは從來の問題となつた有觸れた問題を繰返すといふことにはならずとも出来ることゝ考へたのであります。

國民生活と宗教との關係を述べますには議論の順序として先づ宗教の本質に關して明晰なる概念を有つて掛かることが必要でありま

す。従て純粹に理論の上からして宗教の本質を定め其本質と國民生活との關係を述べることも一法であります。他の一つの方法としては先づ在來の宗教といふものを假定いたしましたして、歴史的に傳はつて來た宗教が、即ち在來具體的に存在する宗教が國民生活とどう云ふ關係を有つて居るかと思ふことを事實の上から考へて見るも亦一つの方法であらうと思ふのであります。私は便宜上後の方法により先づ以て事實存在して居る所の宗教が國民生活と如何なる關係を有つて居るかといふことを考へて見たいと思ふのであります。

斯く事實上歴史的宗教を出發點とすることに致しましても幾多の困難がある様に考へます。例へば歴史的宗教といふ中にも種々の種類があります。自然的宗教といふものに對しては文明的宗教といふものがあり、國民的宗教或は民族的宗教といふものに對しては世界的宗教といふものがある。世界的の宗教といふものゝ中にも自力的の

佛敎と基督敎との關係が如何なるに如く影響を有つ

宗教もあれば他力的の宗教もある。其一々に付て國民生活上に如何なる關係を有つて居つたか又現在有つて居るかといふことを論ずる事は非常に錯雜でもあり六つかしい事でもあるのでありますから、私はさう云ふ細かい議論を暫く避けて、日本に於て又世界に於て最も大なる宗教とせられて居る所の佛敎と基督敎とが、如何なる影響を國民生活の上に有つて居るかといふ事を簡單に考へて見たいと思ふのであります。

此の如く出發點を定めまことに致しましても、尙其間に攻究の仕方は二通りあるであらうと思ひます。と申しますのは此の問題は國民生活と宗教との關係でありますが、其國民生活といふ意義は少くとも二様に解釋すると思ふ。其一は國民といふことを一つの集合名辭と考へまして、國民全體の上の生活、言葉を換へて言へば國家的生活の上に宗教はどう云ふ關係を有つものであるか

と云ふ意味で、國民生活と宗教との關係を考察することが出来る。併し乍ら國民といふ言葉は集合名辭とせずして之を一個人一個人の上にも使ひ得るやうに考へられる。即ち國家を組立て、居る所の個體の上に宗教は如何なる關係を有するのであるか、國民の個人的生活の上に如何なる影響を宗教が有つて居るかといふ風にも考へられることと思ふ。それでありますから第二の考へ方に據りますると個人としての生活と宗教との關係を見ることになるのであります。此二つの見方に付て私は假に第一の見方より考を進めて行きたいと思ひます。即ち團體的生活として、國家的生活としての國民生活の上に宗教は如何なる關係を有つて居るものであるか、此問題を歴史的宗教の中より取出しました佛敎と基督敎とに當嵌めて考へて見る譯であります。先づ佛敎の方から考へて見やうと思ふ。

前に申しました通り、私は宗教に對しては門外漢でありますから、

唯、自分が信じて居る所の事を申上げるより外仕方が無いのであります。私の今日までに信じて居る所では佛教の中にも色々の宗派があるが少くとも原始佛教と今日日本などに存在する所謂派生的佛教の間には随分大きな差異があるものと思ふのであります。而して若し今日現在存して居る所の佛教各派は同じ源である原始佛教より派生したものゝ假定するといふと、佛教各宗の間には無論幾多の相違はありませうけれ共亦同じ流を汲んだといふ點で何等かの同一點もある譯と考へます。而して其同一なる點は總て原始佛教の中にも認められることではあるまいか、是は私が自分に讀んだことがある歩船鈔に依つて考へて居るのであります。が各派に別れると云ふことは要するに到達の手段の相違に基くのである。その行く先に違ひないのであるが、其道行が困難であると容易であるといふ事に依つて、幾多の宗派が出て來るのであつて根本に於て違ひがあるのでは無い

と思ふのであります。假にそれを正しいと致しまするならば佛教の本質は矢張り原始佛教にあるのでそれに到達の難易に依つて各派が生じたものであるといふとは大體假定して宜からうと思ひます。而して其原始佛教の起つた時の有様を考へて見ると、是も他人の研究を讀んで自分が現在信じて居る所を申上げるのであるが、どうも佛教の本當に主とするところは個人的のものであつて、國家的生活即ち團體的生活といふ様なものには直接の關係は有たぬものでありはせぬかと考へられるのであります。即ち釋迦が如何にして出家の念を起したかと言へば老病死の苦を怖るゝ所から如何にして是等の苦を救ふとが出来るであらうかといふ考に依つたといふ事が記録に残つて居ります。それでありますから出家して佛教の修業に着手する動機は全く自己一身の解脱に在つて、純粹なる意味に於て個人的のものであると言ふ事が出来ると思ひます。而して六年の苦行の後に得

た所の成道即ち悟りといふ事も私の解釋する範圍に於ては是亦單純に個人的の解脱である。即ち一切の者は皆其源より清めて行けば宜しい、世の中の禍、苦痛、といふものは皆一に自分の主觀の誤りから起つて來るから、……無明の因に依つて起つて來るから其の無明を去れば世の中から解脱することが出來るといふのである。若し單純にそれだけの意味で解脱する事を欲する、又それだけの目的で以て解脱することを要求するものが佛教の本旨でありますならば、是は全く個人的の事であつて、決して團體的性質を有つて居るものは無いと斷言し得らるのである。即ち今日の言葉で言つたならば一種の哲學であつて、他の宗教といふものとは餘程趣を異にして居るもので有る様にも考へらるのであります。而して原始佛教の此傾きは今日存在して居る佛教の宗派の中にも有るやうに私には想像されるのであります。天台とか華嚴とかいふ宗派になりますと主

として理を推して極致に到達する、理に依つて悟るといふのでは無いかと思ふ、其他小乗佛教に於て種々の戒律に依つて解脱を求め或は南無阿彌陀佛を唱へ或は南無妙法蓮華經に依つて解脱するといふのは所謂近道であるからそれを探つたのであつて、決して佛教の本旨では無い。少くとも原始佛教に存在する本旨に到達する一の簡便法に過ぎぬと見ることが出來ると思ひます、それでありますから佛教は本質に於ては團體的生活に直接關係する點が無い、全く個人的のものであるといふことに歸着するであらうと思ふ。

以上は理論上の推定であるが、事實に於てもそれに相當するやうな現象を呈して居るでは無いか。日本に於て宗教に關する争は無無論無いのでは無い。佛教が這入つて來た時に蘇我氏と物部氏との争の如きもあり、其後も山法師の跋扈したこともあり又各宗派が互に争うたといふ歴史もあります。けれ共未だ國家的團體に關する争といふ

は無いやうである。即ち國家的に宗教を基礎として争うたことはない。言換すれば佛敎的國家を作らうといふ運動をした例は無いと思ふ。無論佛敎と雖も其の敎を信じますならば其の信する所を他にも及ぼすといふことになるのは當然の勢ひであつて、他に及ぼすといふことに依つて他の人をも同化することに努力するのもまた當然の事であります。けれども佛敎的國家を作るといふ團體的運動は日本に於て少くともさう強くは無かつたと考へます。日本の國民が佛敎を信じ其感化を受けたことに依て間接に日本の國家全般が其の影響を見るに至つたといふことは言ふ迄も無い。日本の文物は佛敎的になつて行くことは當然のことでありませう。是は一個人としての日本人が佛敎化したことに依つて、即ち日本人の人格が個人として變つたに依つて、間接日本國の文化が變つたものであつて私の前の分類から言へば其國家との關係は所謂第二種に屬するものであり

基督教の如何

ます。それでありませうから、第一種の考察點より致しますれば、佛敎と國民生活とは直接の關係は無いと先づ斷定して宜いと思ひます。然るに基督教に至りましては其關係が違つて居ると考へられる。是も基督教の研究者の言を信用して申す譯でありますが、基督教と雖もその起りは矢張個人個人が救はるゝことが主眼であるから此點は如何にも個人的であるけれ共、基督が起ります前既に猶太敎に於てはメシヤスが生れて世俗的國家とは異なるメシヤスの國を作るといふ信仰が有つたといふことであります。随つて基督は自分が生れたのは即ちメシヤスの國を建る爲に來たのであると自分も信じ人にも説いて居つたのでありますからして、即ち吾はダビデの子孫であると言つて一種の神の國を此世の中に實現することが吾れの任務であるといふ事を信じて居つたらしくある。随つて其宗派の赴く所は單に個人の解脱といふことの外に、一種の團體的性質を初から有つ

て居つたやうに私は考へられる。聖書の中にもカイゼルに屬する者はカイゼルに歸せといふことでありますけれ共、是は當時基督教の本旨が現在此世の中に於て神國を實現する意志がなかつたといふ證據にはならぬといふ事は、歐羅巴に於ける歴史家の夙に唱へて居るところであります。それでありますから基督教より言ひますならば、國家に對する考は一種の二元論である。即ち實際の世の中に世俗的國家があり、それに對して一種の神國がある。此神國と世俗的國家とは別なものでありますから、基督教が此神國を建てやうといふ事に努力する意味に於て國家的團體的性質を有つて居るものであります。其結果どうしても世俗的國家即ち私共の通常謂ふ國家的生活としての國民生活と基督教とは餘程密接な關係を有つて來るのであります。而して基督教の神學を系統的に述べた所のアウグスティヌスの考によりますると、此世の中の國即ち我々の國の歴史といふも

のは次第くゝに發展して行くものであるが、發展の目的は神の國を此世の中に實現するにある。此世界が基督教の感化を次第くゝに廣く受る様になり、而して段々に神の國に近づく様になるべきものである、實際又さう成るものであるといふ信仰を有つて居つたのであります。此世の中の國といふものは神の國に對して見ると殆ど比較の出來ぬ不完全なもので又望ましく無いものでありますけれ共、それが次第くゝに神の國に接近して行き、最後に此世界が滅亡して神の審判の後に神聖な神の國が實現するといふ希望を有つて居つたものであります。而して此信仰は獨り中世に於て勢力を有つて居つたのみならず、教育史上に於て考へて見ますのに、十六七世紀頃迄の歴史哲學及び學校教育に於ける歴史教授の基礎をなして來たのであります、此の如く神の國と世俗の國といふものを並らべ立てるとに依りまして、國民的生活との關係を餘程密接に持つて來たもので

あります。此點は基督教殊に舊教の中に羅馬法王があるといふ点でも明かなことであつて、歐羅巴の一般の國民は一方に於て其國の君主の支配に屬して居ると同時に、他の一方に於ては羅馬法王の支配に屬して居るのであります。而して此羅馬法王の權力の最も強かつたのは言ふまでも無く中世でありますけれども其勢力は近世に於て決して無くなつたといふものには無い。十五世紀の際に阿弗利加の發見が始りまして遂にバスコダガマに依つて印度の國の航路が發見されましたが、其阿弗利加探險の基を開きましたのは葡萄牙王のヘンリーで、ヘンリーが印度阿弗利加の探險を始めましたといふものは一つは政治上の意味があつたのでありますけれども、又他の一つには宗教上の意味があつたのであるといふことは殖民史の教ゆるるところであります。政治上の意味といふのは葡萄牙の常に大敵として居つたマホメット信徒が阿弗利加に住んで居つたのであります。其マ

ホメット教徒の住んで居る阿弗利加の奥を探險し、これを平げてマホメット教の侵略を根柢より防がうといふのであります。而して第二の目的は同時に基督教を廣めて、出来る丈け多くの信者を取らうと云ふ意味であつたといふことであります。コロムブスの亞米利加發見の如き矢張り宗教的動機も這入つて居つたので、到る處土人を基督教にすることに努力をし、西班牙女王イサベラの如きも亦熱心にそれを希望したのであります。此の如く羅馬の權力は獨り個々の國民の間に行はれて居つたのみならず、矢張り國家をも宗教的にしたといふ傾きがあつたのであります。

然るに國家の有様が一變して、その力が強くなるに隨つて、自然の勢として國家の權力を制限しやうとし、爰に羅馬法王と國家の主權者とは感情の衝突を來すやうになつたのであります。その最著しいのは所謂クルツールカムプと稱して獨逸ではビスマークが獨逸を統一

して強壓手段に依つて宗教の權力を抑へやうとし、羅馬法王と隨分激しい葛藤を生ずるに至りました。ビスマークがエルサスロートリッングンを取つたのでエルサスロートリッングンを獨逸化しやうと考へ、隨つて他の勢力の干渉を去らうと考へた。即ちエルサスロートリッングンには舊教徒が多くありますから、其舊教徒の勢力を制限しやう、少くとも宗教上の權力をして教育に手を出すを止めさせやうといふのがビスマークの教育政策の一つであつたのであります。それでありますから學校の宗教教授に關して、新教徒と舊教徒といふものは同じ學校に來るとして、唯宗教の教授だけは分けてやるとになつたのであります。舊教徒は大に之を怒つて非常な多數の運署を以て獨逸の國會に向つて建議をなし、羅馬法王は之を助けて大に争うたのであります。尤も其前にも千八百七十年に羅馬法王は獨逸の内政に干渉しやうとして一つの教書を出し、その中に羅馬法王には少

しも誤りが無いといふ過去の傳説を繰返して、學校の宗教教授の中に教へ込まうと企てました。それを拒んだギムナジュームの教師がありました。法王は怒つてその教師を罷めやうとした。所がビスマークは教師の任免は國家の權力の内在るからそれは罷めさせぬといふ事では亦種々に争うたのであります。其時には國家は大體に於て勝利を占めた、少くとも名目上では勝利を占めたのであります。そこで國會では愈々一つの法案を通過いたしました。一切の公立小學校は總て國家の管理に屬せしめ小學校の視學官は皆國家の任命に依るべきものであるといふことにした。是は日本人にはチヨツと奇態に感じられますが獨逸は色々歴史上の關係から小學校の視學官を牧師に兼ねしめて居るといふ歴史は今日でも處々にあります。此の如く其時の争は全然國家の勝利には歸したけれ共、而も實際に於て矢張り舊教の勝利に歸したのであります。其時にあつて九百の小

學視學官中、七百名は依然として舊教徒の牧師が其職に就いて居つたといふことであります。此の如く歐羅巴の基督教の實際の事實を見まするといふと矢張り基督教と國家とはどうしても時々相争うたといふことは事實として否定する事は出来ぬであらうと思ふのであります。其事が佛蘭西に於ては最喧ましくなつて居るのであります。數年前より寺院と國家とを分つといふ問題で争つてをるのであります。尤も昨年私の居りました頃より大體法律上の解釋は附いたやうでありますけれども、國民内部の動搖は今以て鎮定をしたといふ譯では無い。此等を以て考へて見ても、基督教の中のどの宗派を指すといふ事は別でありますけれども、少くとも原始基督教、而して私の考ではこの點に於て原始基督教を最忠實に引繼げる舊教では、どうも國家と直接の關係を有つて居るといふ事は事實上認めなければならぬことと思ひます。

然らば基督教と國家的との關係は善い方であるか悪い方であるかといふと是は餘程錯雜した問題でありまして一言で之を解決するとは餘程六つかしからうと思ひます。即ち一國の國民的生活は種々なる要素の結合に依つて動いて行くものであつて、決して單純に宗教のみで進んで行くものには無い。殊に重大なる要素としては經濟的生活の如きものもあり、又其他種々なる關係に依つて全體としての國民的生活は極められてありますから唯一の宗教的要素を以て一國の盛衰興亡を論定することは出来ぬであらうと思ふのであります。併ながら基督教の中でも原始的狀態を最忠實に守つて居り、其等が國家的生活の總てに干渉しやう總てを管理しやうとして居る國家はどうしても今日では餘り勢が宜しく無いと言はなければならぬと思ひます。私がストラスブルグに居つた時に獨逸社會黨の首領ペーベルが來て演説しましたが、其言葉に依ると基督教といふものは文明

及社會進歩の害となるものである。其最著しい例は白耳義を見れば分る。又西班牙、葡萄牙を見れば分る。白耳義はあんな好い地勢を占めて居るに拘らず其國の教育が微々たるとは驚くべきものである。是に現時の白耳義の行政は舊教の主義に據つて居るからのことである。又西班牙、葡萄牙の國勢の衰へて居ることも舊教の影響である。其基督教が行はれれば其國家は榮へぬ、といふことを言つて居ります。尤もペーベルは基督教に對しては極端なる反對黨の首領でありますから其言を信する譯にはいかぬけれ共、教育の實際の成績を考へても、基督教特に舊教に固つてをる國の成績は宜しく無い事は事實である。併ながら又他の一方では英吉利、獨逸、亞米利加合衆國に於て基督教徒の他の宗派を信じて居る者が多數あることを考へて見ると又此基督教といふものは國家的生活の發展の助けになるといふ事にも考へられる。前にも申しました通り國民としての生活は

種々なる要素で働くものでありますから國の盛衰とその宗教とのみを見て、それであるから基督教徒が國民生活とどう云ふ影響を有つて居るといふことの推定は出來ないと思ひます。要するに基督教は佛教に比して大に團體的生活としての國民生活に關係して居ることは事實で有ると思ひます。それが如何に關係して居るかといふことは餘程精密なる調査をなした上で無ければ斷言は出來ぬのであります。

是より本論の第二種の見解に這入る譯であります。即ち宗教を信じて居るといふ事に依つて國家の要素である個人としての國民が如何なる影響を受けて居るか、随つて宗教を信する國民を多數有する國家は如何なる結果を持ち來るのであるかといふことを考へて見やうと思ふのであります。此事に關しましては色々の説があらうと思ひます。第一、エビクルスなどの考では一體宗教といふものは人間をし

て卑屈にさする基である。又人間をして色々の惑を有つに至らしむる根原である。丁度子供が夜、暗黒で藪を見て恐るゝ如く成長した人間は宗教があるに依つて色々恐れを懐き、せでもよい心配をしたりすると云ふ事を主張して居ります。それでありますから此流儀の見方よりすれば宗教といふものは吾人の性格に善良なる結果を及ぼすものでは無い、却つて悪結果を及ぼすといふことになる譯であります。吾人の性格に悪結果を及ぼすものとすれば宗教は國家的生活を悪くするようになる。けれ共、此種の見解は宗教全體に適用すべきものであるとは信じないので、エビクルスがかかる説を唱へるのも恐らく其當時民間に行はれて居つた一種の迷信的宗教の弊害を見てのことと想像されますので、今日斯かる言をなすのは正當なる論と誰も認めないであらうと思ひます。

其次にルナンがグビットストラウスに與へた手紙に、宗教は國家の

公けの戦闘に堪へぬものである。即ち國民が宗教を信するといふことは少しも其國に取つて利益がない、何故なれば基督教の中には些とも國民的道德を説いて居らぬ、又戦争などすることは基督教からすれば悪いといふことになる、國家の發展のために個人々々が戦争に對して勇悍であるといふことを要求するのである、さう云ふ教を立てぬ宗教は國家の發達の爲に何等貢獻するとも出来ぬ、と言つて居ります。併ながら此見解も私の考では一方丈けを見たる説であらうと思ふ。何故なれば一個人としての國民が其國家全體の發展或は盛衰に關係することは唯、獨り直接に愛國的精神或は國民的道德を有つといふことのみ依つて關係して行くものでは無い、其國民の有つ所の性格全體が直接若くは間接に一國の盛衰に關係するものでありますから、直接に國民的道德を教えぬ所の宗教を信することは其國の發展に關係が無いと斷言するのも穩當で無からうと思ふ。

斯う考へて見ると色々錯雑して來るのでありますが更に其論歩を進める前に順序と致しまして一通り宗教の定義と宗教の本質に付て兎に角私自身の執つて居る態度を明かにする必要があると思ふ。此事に關しては千八百九十三年に獨逸のギジツギーが自分達の起しました倫理運動の機關雜誌に於いて幾多の知名の士に質問書を發したたであります。ギジツギー自身の書いて居る所では質問書は四十通出したといふことであります。又其質問の大意は今私共の運動即ち倫理運動は斯う云ふ事を標榜して居る。我々は社會のどんな地位に在る人を問はず又其宗派が何に屬して居るといふ事をも問はず。又政見が何の黨派に屬して居るといふ事をも問はず。單にエーチツセクルトヴァ即ち倫理教化を弘めるとに同意の人が集つて倫理の教化を弘めることに盡力したいものである。といふのである。従つて我々が執つて居る主義は當時の宗教政治或は哲學等に關係をせぬ所の倫

理道德があるを豫想して居る譯である。それでありますから宗教と倫理とはどう云ふ關係を有つて居るかといふ事に付て皆さんの御意見を伺ひたい。そこで二つの問題を提出いたしますからそれに御答をして下さいと云ふ文を作りまして、そこに斯う云ふ問題を書添へて居るのであります。之は翻譯して申しますならば「アナタは宗教といふものをどういふ風に解釋して居らるか」といふ事が第一、第二の問題は「アナタが解釋して居らるる所の意味に於ての宗教は倫理道德とどう云ふ關係を有つて居るものであるか」。此二つの問をば四十の名士へ向けて發したのであるが、その中には政治家もあれば文學者もあり、倫理學者哲學者、其他の者もあつたと云ふことであります。其中凡、二十名程は返事を呉れましたけれども其他の人は返事を呉れなかつた。又中には單に自分の本を指摘して其本を見て呉れと言つて來た人もありました。ギジツギーは色々の人の返事を前の機

關雜誌に載せて居るのでありますが、其返事に據りますと少くとも宗教といふ者に關して四つの見方が現はれて居ると言つてをります。第一の立場は伯林大學教授ハルナック、及伯林の牧師ステツケルと云ふ人等が執つて居る立場であつてこれらの人の立場は言葉は違ひますけれ共大體は宗教といふものは此世界を支配して居る意志が有るといふことを信することであつて、此世界を支配して居る意志は我々に對して益を與へる者であり、我々はその意志に服従して行くといふことを信仰して居るのが宗教である、而して此世界を支配する意志といふのは即ち神であつて、完全なる宗教となることの爲には其世界を支配して居る意志が人格を有つて居ることが必要であるといふのである。最後の句はハルナックは附けて居りませぬが兎に角是等の人の考では人間以上に超自然的の神といふ者があつて之に我々が従つて行くといふことを以て宗教の本質といふやに解釋して居り

ます、第二種の部類に屬する者はヘフディングの答であります。ヘフディングの立場に依ると宗教の本質は世界に或は宇宙に對する從屬の感情である、即ち之に我々が歸依して行く感情である、或は此世界を支配して行く何等かの主義即ち神に歸依して行く所の感情を以て宗教の本質とすると、いふ解釋であります。即ち此ゲヒュール、デル、アブヘンギヒカイトといふのは名高いシュラエルマツヘルの考でヘフディングは大體之を採つて居るので、此説を採つて居る學者は獨逸には多い。パウルゼンの如きチーグラの如きも同じ考を有つて居ります。此種の考を有つて居るのは獨りそれらの學者のみでない、倫理運動に屬する亞米利加のソルターなども稍々それに近い説を吐いて居るので、無限に對する感情を以て直ちに宗教とする。即ち宗教といふものを主として感情の上に置く而も其感情といふものは無限に對するもので、無限なる何等かの者に自分が従つて行く

といふ感情を以て宗教の本質として居るのであります。それから第三の種類に屬する者はスペンサーの説であります。スペンサーは御存知の通り自分の著書のファーストプリンシプルに書いて居る。其所に述べて、世の中に多くのドグマがあるが、其ドグマは宗派に依つて違ふけれども、其ドグマを離れて一つの者がある、即ち其ドグマを離れた所の一つの力に對する意識が纏て宗教であるといふ風に見て居るのであります。第四の種類とも見ることは出来たのは英吉利のスチーブンの説であります。スチーブンの説に據ると宗教といふ者は先づ一つの哲學である、何故に哲學であるかと云へば宇宙に對する一つの説明であるからである。宇宙に對する説明の總てを信仰として有つことが纏て宗教であるのだから矢張り宗教といふものは哲學に屬するものであるといふやうな考であります。此種の考も随分多く有る様に思いますが、その時の答の中に載つて居ります。

ルスのサイエンティフィックリジオンといふことも稍之に近い、宇宙に對する見解を以て直ちに宗教といふ様に見て居るのであります。此等の答に依りますと四つの見方が宗教の本質に付て有つたやうであります。さて私は此中のどれを以て宗教の本質と信じて居るかといふことを申し上げます、先づ以て是等の見方に對する人の批評を參考にする必要があるのであります。從屬の感情を以て宗教の本質とすることに對しては是は色々の非難もありませんので、倫理運動の獨逸の主張者である前のギヂツキーなども之に對して不同意を唱へて居ります。即ち宗教といふ言葉を此の如く廣い意味で使ふといふことは歴史的に一定の意味のある言葉を妄に他の意味で用ゐることになる。ギヂツキーなどの説にしても宗教といふものは超自然的の一つの不思議なる力、即ち神に對する信仰であつて其神に從屬して居るといふことで無ければ本當の宗教といふとは出来ぬ、といふ

見方であります。此見方に對して同じ伯林の倫理運動の主張者の一人たるプロフェツサーフォイスターなども同じ意見であります。此外、英吉利のロマネスなども同じ意見でありまして、ロマネス自身は曾て自分はアグヌスチズトでありましたけれ共、今で思へば宗教といふ者をさう廣く解釋する、スペンサーの様に不可知的宗教といふものも一つの宗教といひ、宇宙に對する感情を以て宗教とする宇宙宗教といふやうなことを以て一種の宗教の中に數へ、或は人道を以て一つの宗教に數へる様な見方、さう云ふ廣い意味に宗教といふ言葉を使ふのは言葉の濫用であつて正しい事では無い、宗教といふ者は矢張り前に言つた様な神に對しての信仰で、その支配に屬するといふ者で無ければ宗教と言ふ可らざるものであるといふ様な意見であります。而して此説を最極端に主張して居るのは言ふまでも無く舊教徒でありますが、其舊教徒中倫理學者として有名なカルトラ

余の意見

インなども熱心にこの意を反復して居る。其人の意見は色々の本にありますが小さい本で「宗教と道德」といふ本の中に最真面目に此事を詳論して居る。是等の人即ち不可知的宗教或は宇宙宗教とか人道的宗教とかいふ様な論をなす人は要するに宗教家では無い。所謂凡神論者は總て無神論者であるといふ論をして居ります。斯う云ふ事に感じて居るのはカートライン一人でない、羅馬舊教では今日でも熱心に主張して居ること、昨年七月に出した羅馬法王の教書といふものは最真面目に此種の見解を明にしたものであります。私の信する所に依りますと、宗教といふものはハルナツク始め宜教師若くは神學者の唱へるやうに超自然的の實在を自覺して神を信じそれに歸依する念の無い者はどうも宗教といふ名を與へることは適當せぬやうに考へます。私は假にさう云ふ種類の者丈けを指して宗教と名づけることにしたいのであります。随つて超自然的の神に對

して信仰を有つといふことは、個人の性格上に如何なる影響を及ぼすか、随つて此種の性格を有つて居る個人は國民として如何なる直打を有つかといふとを考究するのである。第二種の見解の宗教といふものも此意義に合するだけ正當と思ふのである。茲にチョツと注意をいたして置きますが、斯く申しますると佛教少くとも原始佛教といふものは宗教に這入らぬでは無いかといふ疑問が起るのであります。成程私の前に解釋したことが原始佛教に對する正當の見解でありますならば、それは宗教といふものに這入らずして、寧ろ哲學或はその他の名稱を附ける方が正當かも知れませぬ。けれ共世に多く流布して居る所の佛教は、少くとも私自身の見ました範圍内に於ては矢張り宗教的性質を充分帶んで居る様に思ふ。私の家は代々曹洞宗に屬して居るのでありますが、曹洞宗の坊さんが來て御經を讀む、その御經は如何にも理窟的の事を書いて居りますけれ共、家族の人

宗教は吾人の心意に如何なる關係を有するか

人が有つて居る信仰といふものは理窟では無くして矢張り神佛といふ一種の靈的の者に對する信仰で、又それに信賴する感情が備はつて居るやうにあるのであります。それでありますからして、私のやうに宗教を解しても實際日本に行はれざる佛教が宗教以外に刳退けられる憂は無きこと、思ひます。次に斯う云ふ風に見て來ました宗教は吾人の心意に如何に關係を有つて來るかといふ事になるのであります。それを斯う云ふ風に解釋して見たいと思ふのであります。一體我々の精神は色々の見方に依つて之を分けることが出来る。併ながら先づ之を概括して見たならば二つの方面より見ることが出来る。即ちその一つは我々の精神活動をスタチカルに見ると申しませうか、……精神活動が統一をして居る側を見るのである。而して他の一方に於ては統一を有つて居る精神が動いて行くダイナミカルに働いて行く側を見るのである。

而して我々の性格は要するに精神活動の統一と、その活動の現はれでありますから、此二つの方面を考へましてそれと宗教的信仰とは如何なる關係を有つかを考へるならば、稍此問題の解決に近づくことが出来るであらうと思ひます。

然るに精神の統一的方面といふことでも少くとも二つの方面を區別することが出来る。第一は其統一の度合である、即ち其統一の堅さであります。精神活動の全然不統一なる人は常人とはいへまいが、統一がチョット付いても、直ぐにこの統一が破れる人があるに違ひない。その統一の度合を能く考察することが出来る。第二は精神活動の統一の形である、形といふのはその統一が單に強いとか弱いとかいふとで無く、如何なる形を取つて其統一が存在するかといふことであります。精神活動の統一といふ方の側は所謂我々の主義が一貫して居るといふことにある。精神の統一の形ちといふ側は、その統一

が如何なる主義によつて居るかといふことになるのであります。次に精神の活動の方面にも亦二つ見方がある。その一は精神活動の遅速強弱である。即ち精神が活動するのに早く活動する人もあり遅く活動する人もある。強く働く人もあり弱く働くものもある。第二には人の活動の性質とも言ふべき者であつて、是は單に強く行く弱く行く早く行く遅く行くといふ事で無しに、如何なる風に活動するか、即ち原因結果の理を能く悟つて活動する人もありませう、又自分を信仰すること厚く、一方に固執する人もありませう。これは即ち心意の動的方面の第二項であります。併し此四つ、即ち統一の強度、統一の形式、活動の遅速強弱、活動の性質といふもので以て我々の性格の大體の傾きを規定することが出来ると思ふ。

然らば宗教を信するといふことは是等の精神的活動の上に如何なる影響を及ぼすかと言へば、私の觀察では第一の統一の堅さに對して

は宗教的信仰は非常に大なる効果があると思ふ。何等かの信仰を有つて居る人は意識の統一は誠に堅固になるものであるといふ事は事實許すべきことと思ふ。即ち信仰を有つて居る人は主義の有る人である。而して主義の有る人といふものは個人として貴ぶべきのみならず、主義の有る人間より形成されて居る國であるならば確かに強固なる國であるであらう。それでありますから此方面を見ますならば宗教を信することは、殊に超自然的の力を信するといふことは人間の意識の統一を非常に強くするものであるに依つて、國民性を強固にし國民生活といふものに對して非常に良好なる結果を有つものと言ふことが出来ると思ひます。

所が第二の點になりますと餘程是が違ふ、即ち宗教的信仰は如何なる種類の精神的統一を有つかといふ事は、是は其宗教の有つて居る所の信仰の内容に關係するのであります。若し其宗教といふもの

本質は單に何等か絶対の者に從屬して居るといふ感じである。而して其絶対の内容が明に規定されぬといふことであれば、其信仰の當然の結果として統一の形が極らぬといふ事になる。併しその信仰といふものを私が申上げましたやうな何等かのシステムを有つて居る者即ちドグマを有つて居る者とすれば、その當然の歸結として我々の意識の統一の形が何等かの一定の形を取らねばならぬことになる。この形が一定すると其統一が強いだけそれだけ、其形の如何によりて困難が生じて來るのであります。即ち其人の執つて居る主義といふものは他の事情に依つて極まるので無くして信仰の内容に依つて極まるのであるから、其信仰の内容が正常であれば非常に宜しいのであるが、若しそれが迷信的でありますれば國民生活を不健全ならしむるものになる虞があります。然るに歴史的宗教は基督教にせよ佛教にせよ過去の社會の事情に於て成立し、過去の社會の情

態に依つて統一の形成が極つたので、其ドグマ其教義の根本も過去に於て定まつた者であるから、若しも社會といふものが變遷するものとしませぬならば、其間に非常なる困難を生ずるといふことは論理上免がれ難いことである。即ち宗教の執る所の主義と社會が要求するものとは必ずしも一致せぬといふことになる。是が一致しないといふことがあれば當然の結果として國家的の生活といふものと宗教上の信仰といふのは激烈な衝突を來す。其信仰が強ければ強い丈け衝突が激烈になることは免がれぬ所と思ひます。

次に活動の強弱遲速でありますが此點に關する宗教の信仰は國民生活に大なる助をなすものと思ひます。何となれば信仰を有つて居る人は思想に統一が付いて居る、従つて疑ふところが無いから其活動は非常な力を有つことが出来る、思ひ切つた事が出来る、故に斷乎たる處置か出来る譯であつて、是が宗教に従事する人が動もすれば

狂熱の状態に陥る所以と思ひます。それでありますからこの點に就て宗教を信ずるといふことは先づ國民生活に宜いのであります。併し第四の點に於ては再び短所を有つことになりはしないか、即ち人が或宗教を信じ、一個の主義に據つて居ると其活動する範圍はどうしても狹隘になり或は一方に偏する、随つて物を考へるにも悉く自己の信じて居る信仰のカテゴリーの内に入れて考へますから、考が圓滿に行くことは出来ない。非常に熱心ではあるけれ共其熱心の向ふ所は動もすると當を失しまして、却つてその思想性行を不健全ならしむる虞がある。是は吾人の上の經驗で明なことで、私が高等學校に居る時に禪が大に流行したから、私もやつて見やうと友人に言つた。さうしましたらば一人の友人がそれは止すが宜しい、禪をやると馬鹿になるから止せと言つた。その當時は平氣でをりました。が今にして思へば禪をなせば馬鹿になるといふ道理は無論無いが、

その馬鹿になるといふ理由はその活動が盲動となつて仕舞つて、適當に活動を發展させることが出来ない、即ち活動の性質の上に欠點を出すといふ所から友人がさう云ふ事を言つたのぢや無からうかと存じます。さう云ふ風に活動の性質といふ點に於て、基督教なり佛教なり深き信仰を有つて居る人は欠點を有ち易いことであらうと思ふのであります。

斯く考へて見ますと宗教を信するといふことは個人の性格を一方に於ては善くし一方に於ては悪くするといふ事になる、然らば宗教といふものを信じながら其欠點を免れることが出来るか出来ないかといふことであります。是は單に理論上の問題としては無論出来得べきものであらうと思ひます。實際上には困難なことであります。何故なれば前に申す通り宗教といふものは信する結果として第一に來るものは精神状態の統一を堅くするのでありますが、其統

一の堅さといふものは自然の勢として、そこに何等かの教権を要求する事になる。之に就ては加藤玄智君が何時か哲學雜誌で講述せられました通り、教権といふことと宗教といふものは離る可らざ關係を有つて居る。而して其教権の在る限りその教権は變ることとは出来ないものでありますから、宗教はどうしても保守的になります。是は昨年七月に羅馬法王の出したエンチクリカなどでも解ることと思ふ。その大精神は今日の神學、今日の宗教の欠點は神の教を絶対に眞理とすること能はずして、ドグマは變るものである變化するものであるといふ風に見る點にある。絶対の眞理は變化するもので無いといふことを主張して居ります。此主張を論理的に考究するならば羅馬法王の主張する所は正當であると思ふ。若しも嚴密な意味に於て宗教を主張しやうといふことになつたならば一切の宗教が同様なことを主張しなければ合理的に即ちコンセンストリーにはいかぬ

と思ひます。若し論理的考究の結果、宗教のオーソリティーの上に一定不變の眞理を認めて、それが發展を許さぬならば、世の進歩と調和する上に於て自然の勢として困難を生ずる道理である。即ち前に挙げた第二及第四の點に關する困難を容易に除くことは出來ないことであらうと思ひます。それでありますから宗教に關する困難といふものはどうしても去り得ぬものでありはせぬかと思ふのであります。

然るに茲に又斯う云ふ反對説を入れることも出來ると思ふ。それならば宗教といふことの任務を變へたらどうか。宗教といふものは單に個人の性格を統一するに必要なこと丈けを教へて其統一の方針を指定しない、其内容を指定せぬといふことにしたらどうか。即ち宗教といふ者は現世の事に携はらぬとして、超現世的の事丈けを司ることにしたら斯かる困難は免がれるぢや無いかといふのであります。

成程此る原教が若しも正當のものであるならば随分都合の宜いものであつて、それで以て充分に吾人の意識を統一することも出來、又吾人に充分の活動のモチーフを與へることが出來ると言ふならば、それは大に望ましいことと思ひます。併ながら前にも困難があるものであります。少くとも過去の事實としてはドグマの内容即ち信仰箇條の内容が確定して居れば居る程宗教の力が強い、その内容がボンヤリして居れば居る程宗教として力が弱いと思ふ。是は私の如き狭い經驗で斷言することは出來ませぬけれ共、實際獨逸では舊教は新教より熱心であることをいふことは事實である。殊にフライデラーは學校教育の問題に對する意見を公けにして、同じ學校に於て基督教の舊教を信する教師と新教を信する教師と一緒に集めて學校教育をなすことは新教の爲に不利益である、何となれば新教徒は基督教に對する信仰が舊教徒より厚く無いからして兩方の種類の信仰を有

つて居る教師が一つの學校に居れば其學校の生徒は自然の勢として舊教主義に傾いて行くからである、といふことを公然と述べたのであります。其當否は別として之に依つても獨逸で舊教徒の方が新教徒より信仰の度合が強い、新教は自由であるだけそれだけ宗教としての力、信仰の力は弱いといふ事實が有る様に考へます。是は専ら獨逸の學生などで私が目撃した所でありませぬ。舊教徒の學生は如何にも眞面目で舊教徒の組合へ這入つて居る學生は、日曜日には教會に行き、又手に珠數のやうな物を提げて居る。従て宗教に對する信仰は堅いけれ共新教徒の學生は大抵は自由な考であるかの様に見受けましたのである。若し是が教へるところの教義の内容がドグマチックであれば有る程信仰が堅い、それが自由であれば有る程信仰が弱いといふ一つの例であるとするれば前に擧げた缺點を去らんとして教理の内容より生ずる褊狹なる主義を去らうとすることは同時に宗教の

結論

生命を弱くすることになりはせぬかと思ふ。さふ云ふ事にならぬといふことなれば最都合の宜いことである。私共局外者の位地に立つものは、さうなることを希望するのであります。又この方針で進んで行く宗教は國民生活と調和して行くものと思ひます。要するに國民生活と宗教とに關する最後の斷定は十分に附き兼ますが、若し將來の宗教が前に列擧した困難を去つて、さうして宗教といふものゝ力を充分に保持し、其弊害を除くといふことに努力するならば、それは國民生活の發展を助くることが出来る。併ながら若しそれに反しまして羅馬カソリックの如き今日の人に殆ど信仰の出來ないやうなドグマを有つて行くことは、自由思想を抑へて科學的研究そのものにまで干渉する様になりて却つて國民生活の發展を妨碍する譯であると思ひます。

文學士 有馬 祐政

私は實際的に考へて居りますからその點について少しお話致しませう、然し草稿は唯今此處で書きましたやうなことで、淺薄でもあり且不完全と思ひますが併し亦御參考になる點もあらうかと存じまして簡單に申したいと思ひます。此問題は理論的ばかりで無く先きに御話の通り餘程實際的の方面を充分に研究しなければならぬ事だらうと考へます。大體は理論的の考察とそれから歴史的の考察と相俟つて行かなければならぬと思ひますが、理論的の方は此處で充分申す譯には参りますまいけれ共、大體は宗教といふものは個人的性質のものである、インディビジュアルのものであると斯う思はれます。併し信仰を得ました結果はユニヴァーサル即ち宇宙的のものである

宗教とは何ぞや

国民生活とは何ぞや

と考へます。それから又一方は未來といふことも對象にして居るのであります、自分の死んだ後の悟りであります。併し段々悟つて行きますと單に未來ばかりに限つたのでは無い、過去現在未來の三世に涉り而も時といふことの考を超絶して居りました、其結果超絶的(トランスセンデンタル)のものにならうと考へます。尙宗教の性質を色々申して見ますれば或は絶對的の基礎になるだらうと思ひます。又先きに吉田君の御話の通り超自然的、尙東洋で用ゐて居る言葉で申すと出世間といふやうな性質も有るだらうと思ひます。頗る簡單であります、先づ宗教については私はさう云ふ風に考へて居ります。それに對して国民生活はどうであるかと申しますと丸るで反對ぢや無からうかと考へます。国民生活は申す迄も無く個人的ではありません。又宇宙的のものでも無からうと思ひます。即ち社會的であり又團體的であります、それから未來的で無いことは明瞭であり

歴史的考

西洋の方面

ませう。又三世を超絶するトランスセンデルタルのものでも無からう即ち現世的であります。此世を唯一の對象として存在するのであります。生れた前とか死んだ後とかいふことは國民生活には無いのであります。現世的であり現在のであり世間的であり相對的であり差別的のものであらうと思ふ。さう云ふ風に考へますると、理論上宗教と國民生活とは全く反對のものであらうと思ひます。併し其調和は如何で有るかといふ事は大分長くなりますから後とでチヨツと申したいと思ひます。

次に歴史的の考察はどうであるか。我々西洋の事はあまり存じませぬから申上げ兼ねることでありますが、大體今日までの考で申上げますと。どうも西洋殊に歐羅巴の方は國家が非常に近く寄り合つて居る。蟻のやうな工合に小さい奴が澤山出來て居ます。数はタンとありませぬけれ共、チヨツとテーブルの上に載せた地圖で見ますと實

に小さい國が益々と角を生じて摩り合つて居るやうな状態では無からうかと思ひます。尙歐羅巴人の從來のキャラクターから考へても、ナカ／＼猛烈なるものであらうと考へます、非常なセルフイツシユな、又クルエルな、非常な亂暴な、所謂猙獰とでも言ひますが、自分の一つのトライブスとかネーションとかいふものだけを護つて、それ以外の者はスツカリ絶滅させなければ止まぬといふやうな随分はげしい性格を具へて居りはしないか、私には左様に思はれる。それは戦争の際などでも餘程著しく現じ、又平和の社會状態に於ても其事が現はれて居りはせぬかと思ひます。然るに幸ひに希臘哲學なり、又羅馬時代に基督教が這入つて來て漸々盛んになりました。是が餘程歐羅巴人の性格に適切ぢや無かつたかと思ひます。それらの猙獰なる性格を和けて此小さい争をして居る時に丁度、一つの理想的平和的の誠に穩かなやさしい心を起さすといふやうな事に於て

東洋の方面

非常に其宗教即ち基督教が働いたのでは無からうかと思はれる。言換へて見ますと、非常に従屬的の自分のトライブスだけを維持發展して行かうといふ極端な性格に對して、非常にユニヴァーサルな宇宙的超世俗的或は社會的なる思想を與へるといふ事に於て、歐羅巴の今日の有様は能く調和されつゝある様に見受けれます。ア、云ふ風に澤山な長い時の争を、心の中では多少——居るでありませうけれども、形の上に於ては現在平和の状態を保つて行くことになつた事に於て、確にそれが證據立てられつゝあると思ひます。西洋の事は充分は分りませぬがその位に考へるのであります。

東洋はどうであるかと申しまするとどうも國民生活が之が爲に破壊せられつゝある様なことがあります。丁度歐羅巴と反對になつてをるやうであります。印度は申す迄も無い全く破壊せられて仕舞つたのであります。それから南方の小さい國々、緬甸、暹羅、安南皆段

支那に於ては如何

段とさう云ふ風に傾きつゝある様に見受けられます。支那はどうであるかと申しますと矢張り宗教の爲に蝨に喰はれたやうな風があります。併ながら支那には御承知の通り儒教といふものがありました。是は餘程宗教とは反對のものであらうと考へます。是も中には天を崇拜して殆ど宗教的のやうな分子もありますけれども、論語及孟子等の立場から申しますと、政治經濟といふことを以て道德として居りますので、全く社會的經世的世間的相對的思想を以て成立つて居る様に見受けるのであります。其感化が非常に強いので、どうも如何に強く佛教が参りましたもそれを破壊することは出来ないやうであります。却つて下手な佛教は儒教的になりまして、一方では宋學であるとか他の一方では明學とかいふて、それらは儒教の下に佛教が入れられたかの如き有様がある。さうして道德に一つの基礎を與へる、それが一つ教理の方から佛教の哲學的分子をそこへ持つて來た

のであります。

又宗教的の分子の這入つたのは文學であります。詩とか文とかいふやうな方面にナカク、宗教的の分子を採つた。是は白樂天とか蘇東坡とか皆餘程宗教の感化を受けて居るのである。即ちそれを喜びそれを楽しんで居つて、詩や歌の材料にして居る。それはまづ學者の方面である、それから同じく極く下等な無學の社會に置きましてはどうであるかといふと、佛教は單に未來の悟り丈けで無くして之を現世の利益に用ゐる。此世の幸福の爲にやるといふやうな、矢張り宗教の本旨ぢや無しに、儒教的の立場から佛教を利用したやうに思はれます。であるからして、今日の狀態にしても澤山寺が支那にありまして坊さんが澤山居るやうであります。本當の宗教といふものは無い様であります。皆それは現世的であるか或は哲學的であるかどちらかである。又或者になりますと間々全く國民生活を離れて

モウ一向無頓着で世上の盛衰興亡などに對しては何等の感覺も有つては居らぬ。先程吉田君の言はれた禪宗をやれば馬鹿になるといふ様な、さう云ふ連中も間々あるかと思ひます。是も私がいつて見たのでありませぬから能く分りませぬが、聞いた所でさう考へられるのである。又書物の上からもさう云ふ風に見たのであります。畢竟支那に於ては宗教といふものは國民生活の材料にしてをります。即ち宗教からいへば其生命本領を失つて居るといふ風に見受けるのであります。

日本はどうであるかといふと、どうも私共の考では純然たる宗教は我邦に於ては残念ながら無からうと思ひまするのであります。何故かなれば、是まではさう云ふ宗教もありました、佛教でも三論法相といふものは前には傳はつて居りましたけれど、何時の間にか其影が無くなつた、それから今勢力を得て居る宗派は皆國民生活國民的

純然たる
宗教なし

精神を離れては居らぬのであります。マア華嚴宗の如きものもそれは有りますけれ共是とても今は丸るで無勢力である、何故なれば是は哲學的のものでありますから、それは國民生活と相容れぬといふことで、段々と無くなつて、華嚴宗といふ教理はありますけれ共それを實行もせぬそれを教へる者も無い、マア寺ばかりが残り御經ばかりが残るといふものであります、華嚴宗の精神は日本には純然として存在して居ることは認め悪いかと考へます。兎に角天台、それから眞言宗でありましたも、其後の淨土宗であらうが、禪宗であらうか、日蓮宗であらうが、皆國民の生活を以て其宗派の基礎を培養し、又國民的精神を以て其表面を修飾する所の材料にして居るのであります。であるからして、どうしても日本に純然たる宗教は存在して居るといふことは言へないと思ふのであります。其邊の事柄は諸君に於て充分御了解であらうと思ひます、御承知のことであら

信仰は個
人的なる
べし

うと考へます。兎も角も日本ではどうしても國民的生活に適切なもので無ければいかぬ。基督教にしても矢張りさう云ふものであります、今尙色々議論が盛んに戦はされて居るやうであります。それで以ても充分推測が出来るだらうと思ひます。私の考はどうかと申しますと、どうも宗教といふものは唯個人に於て未來が怯い一寸先きは剣呑であるといふ考からして信じたいと思ふならば、其人は充分に信じなければならぬと思ふ。併し元來が個人的のものでありますから、今自分の信ずるところを日本國民全體に信じさせる譯にいかぬ。况や外國人全體に用ゐさせる譯にいかぬ。唯個人個人に於て深く自分の心の中に蓄へ、臨終の際の覺悟を平生に極める。佛教の語に信心を内心に深く蓄へて、といふ言葉があります、又平生業成といふ言葉があります、此等はさう云ふ性質のものと思へます。さうして國民生活に抵觸するといふのではないかぬ。それに抵觸しな

日本人は
道德萬能
主義なり

い様にするので、さう云ふ風に内心に蓄へて平生にそれ丈けの覺悟を極めて置くやうにする。それで宗教の本質は今申す通り反對でありますけれども、斯う云ふ風に行けば宜しい。其信仰を直ちに實行上に現はして行かうといふと、國民生活を破壊するといふやうな事になるのであります。國民生活といふものは、どうしても人間と生れた以上は絶対的に是は必要なものである、必然的に皆さう云ふ風にやつて居る。國民生活を失つた人は人で無い、嚴密なる意味に於て人で無い勿論國民ではありませぬ。それに反して宗教は自由であらうと思ひます、個人の自由である。憲法にもある通り信教自由なりといふことは私では正當なものと云へる。殊に日本人は道德萬能の國民である、即ち道德の爲に道德を實行する、此國家の爲に自分を犠牲にして國民生活を全うしたい、それで安心立命して居る。未來がどうであるとか前世がどうであるとかいふことを考へる者は、

現世主義
の國民

割合に少い人種であらうと思ひます。全く無いでは無いけれども、さう云ふことはあつても、モウ固まつて仕舞ふ。所謂孔子の未知生焉知死で、寧ろ人生といふものを自分の舞臺として居ります。死んだ先きとか未來とか神佛とかいふやうなことは分らぬ。分らぬことを幾ら考へても分らぬから、それは論すべきもので無い。唯、我々は此國家の爲に國民生活を全うすれば、後世も憂るところは無い、其處に於て安心立命してをる。又朝聞道夕死可といふて、平生國家に對して或は國民生活といふものを全うすることが出來さへすれば何時死んでも惜まない。戰場に出て居つても泰然自若、陛下の萬歳を唱へて目を閉づるのであります。たゞ宗教の必要を感じた人は之を信すべきである。併しそれを内心に深く蓄へる、平生業成として、自分がそれ丈け蓄へて置く。さうして實際生活に於ては他くまでも國民的に活動して行つたならば、兩々相對して其特色を現はし、其本領を

維持して、而も能く調和することが出来得ること、自分では考へて居るのであります。極く大要であり且簡單ではありますけれども、一言申述べて諸君の御批評を乞ひ、又御示教を乞ひたいと思ひます。猶ほ御参考になることもありましたならば、甚だ幸ひとする所であります。

文學士 加藤 玄 智

道德と宗教

私はチヨツと此席で御尋を致したいと思ひます。有馬君は國民生活の方を相對界の方に置かれてさうして宗教の方を絶對界の方に置かれましたがそれは私も非常に賛成であります。それに對し少し考へて居ることを述べまして有馬君のをエルゲンツェンすることが出来れば幸と思ひます。そこで順序として一言申し上げ度いのは、道德と宗教の關係であります。一時沸騰しました此宗教と道德との關係に就いては今でも尙議論が止まないと。片方で超宗教と言へば片方は超倫理と互に鎬を削つてをります。然し其の問題も今有馬君の御話の如き處から解釋したら解釋が付きませうと思ひます。矢張り國民的生活又は道德的生活と宗教の生活即信仰の生活と先づ大體分け

たら宜からうと思ひます。則ちさうすれば道德は矢張り相對界の規定であるといふことは言へると思ひます。其最終の點が何處に在るか、それは絶對界ではないかといふことになる。無論異論もありませうけれ共、兎に角道德の云ふ五倫五常とか君臣父子夫婦の關係と言つても皆相對界の規定であることは明かであらうと思ふ。そこで社會國家は其相對界のことを重もに本領にして居る。そこで相對界の道德は絶對界を本領にしてをる宗教と撞着するかどうかと云ふ問題に畢竟ならうと思ひますが、夫に付て私の結論だけ申しましたならば、道德宗教は撞着せぬものと云ふことであります。併しそのことを長く論じましては大變御邪魔になりますから、便利の爲めに中世のペルナルドの言葉を引ひて見ましやう。御承知の通り有名なペルナルドといふ人はミスチックに屬した人でありましてスコラスチックのアペナルドに對立されたのです。併しペルナルドは趣味の有

ることを言つて居る。彼は信仰の段々發達して道德と續付いて行く階段を三つに區別して居ります。則ち信仰の極く幼稚な人といふのは己の爲に神を愛するのである。例之不動様に祈禱をして幸福を願ふとか或は天理教會の水を呑んで熱病の平癒を禱るとかいふやうなのは是れで、甚しきは泥坊をしても急に露見しない様にと言つて不動様に禱るといふのが己の爲に神を愛するといふ段階である。それは一番信仰の低いものだといふ事をペルナルドは言つて居ります。然しモウ一步進みますと神の爲に神を愛するといふ階段が出て来る。神の爲に神を愛す、是れは極結構だがこれは宗教あるを知つて人類あるを知らずと評すべきか、さう云ふ情態であらうと思ふ。若し實例を申すならば猶太の非常に律法的に化石した宗教は是で、基督はこれを述べて「安息日は人の爲に作られたか或は人は安息日の爲に作られたか」といふ様な、さう云ふ問題を起した時代である。即ち宗教

の爲に人を犠牲にして居る時代、それが即ち神の爲に神を愛すといふ時代であらうと思ひます。印度の方では婆羅門教が丁度其階段であらうと思ひます。詰り自我、自分の身を無くして神の爲に神を信する状態であります。それは結構なれ共ベルナルドの考では未だ足らぬ。モウ一つ高い階段がある。それはどう云ふ階段であるかといふと即ち神の爲に己を愛する階段である。第一のは己の爲に神を愛し第二に尙進んで神の爲に神を愛したけれ共、今度第三には神の爲に己を愛するといふ階段にならなければならぬといふを言つて居る。その立脚地から觀察しますと自分の身體を婆羅門のやうな所謂禁欲主義若くは肉慾勵殺をやる必要は無い、身體も愛せなければならぬ。然しそは己の爲に己を愛するのではなく、神の爲に己を愛するのでそこが宗教信者の眼光が普通人と違ふ所と思ひます。實際ベルナルドは上申した三階段の尙初級として一階段を設けて居りますが、

宗教に這入らぬ前の人間の意識状態は全く唯己を愛するので一番低い、己の爲に己を愛する状態である。それなら最後の神の爲に己を愛する状態も、矢張己を愛するのでありますから、同じことでありますけれ共そこに宗教信者の胸中自ら光風霽月の如き世界があつて、そこを見て置いてさうして己を愛するのと其世界を全く知らずに唯己を愛するものとは違ふと思ひます。即ち哲學上の言葉に直して言ふならば例へば現象界と本體界といふ者をチャンと知つてさうして本體界に身を置いて現象界に活動して行くといふと所謂胸中自ら餘裕があつて悠々自適するところがありまして非常に自分の眼光が變つて来る。現象界に寄托して居る者が一つそれ以上實在の世界に一步超越せなければならぬ、精神的に一過死んで仕舞はぬければならぬ、死んで仕舞てモウ一度生き復へる、それが基督教で喧しく言ふ更生てふ精神の状態であらうと思ひます。ゲーテの所謂 *Stirb und werde*

で基督と共に肉と慾とを十字架に釘づけ「肉に死んで靈に生きんければならないのです。さうした上で實在界からもう一遍現象界に下つて現象界に身を處して行きますと綽々たる餘裕を以て現象界に立つて行くことが出来る。世間日常の道徳を行ふにも常に自分の精神中に非常な愉快と満足とを以て實行して行くことが出来るやうになる宗教信者も先づ其處に行けば眞の宗教信者であらうと思ひます。若しさうでなければ則ち能く言ひます野狐禪である。吉田君の云はれた禪宗をやつて馬鹿になつたものであらうと思ひます。眞の立脚地は現象界を一遍超越してモウ一遍現象界に這入つて来る。——今日の言葉で申せば現象即ち實在と言つても宜しい——それに參らなければいかぬ。若しさうなればパウロが云つた様に如何なる困難があつても却つて耐忍と歡喜と希望を其中から生じて来る。普通の人は失望し煩悶して居る處に何故宗教信者は忍耐心を生じ希望を生じ喜びを

道徳實行
の根柢

生じて来るかといふと即ちそれは自分が神と合體した生活を現象以上の處に見てをつて更にその一段高い處から下界を眺めるからそれで現象界の事がさう苦にならぬことになると思ひます。そこがペルナルドの「神の爲に己を愛す」といふ情態であつて宗教信者はそこに行かなければならぬ。其處になると日常の道徳も容易なる歩みを以て實行して行くことが出来ると思ひます。このことは唯、理窟ばかりで私が申すので無く實際事實上宗教の信仰を得た人の生活はさうなつて居ります。「身を捨て、又身を撈ふ具杓子」世を捨て、又世を救ふ善知識で、實際現象以上に身を置いて而も現象世界に立つて衆生を濟度し又自分自らも日常の道徳實行を完全して行くので基督教の高徳な聖者又は佛教の高僧等の實歴がさうなつて居る。かうなれば道徳と宗教とが事實上完全に調和したのである。此點から見れば道徳の實行は宗教に根柢を置いて初て完全になる者と考へらる。宗教は其

處に行かなければならぬ。殊に佛教や基督教の如き十分發達した宗教で事實上さうなつて居る。其意味に於て道德と宗教とが全く一致調和したものである。けれ共又道德と宗教の違ひに付て考へて見ると、道德は現象界を本領とし宗教は絶對界を主眼としてをる。絶對界とは之をゴッドと云つても宜いが、抑上申した立脚地から考へて見ますと一時中島徳藏君と近角君一派の爭論であつた、親鸞上人の善もほしからず惡も恐れなしと云ふことも、實は問題でないと思ふ中島君はこれだから宗教は不可ぬといふけれ共それは宗教と道德がその立脚點を異にして居るからのごとで詰り道德が相對界を重もに根柢とし而して相對界に根柢を置く以上はどうしても善惡を立てて行かなければならぬが、宗教の方の立脚地は絶對界であるから其絶對界の方から言へば寧ろ善惡の區別を超越するのであります。絶對の世界には差別相對の善も惡もそんなことは無い。故にそれを

極端に言現はしすまと善人尙往生す况や惡人をやといふことになつて來ます。宗教は哲學と多少そこが違ひますかと思ひますが、宗教は非常にコンクリートのシンボルを要求する、それが宗教的意識の特色である。コンクリートのシンボルを要求する以上はどうしてもシンボルは現象界のタームで現すより外仕方がない。之に反してアブストラクトのシンボルの何であるかといふと哲學者の言ふやうな例へばスペンサーは不可知とか云ふ様なもので、それは消極的シンボルであります。老子の無名、易の太極即無極、ハルトマンの無覺皆さうでありました。然るに宗教意識は之に反して具體的のシンボルを要求する、そこで阿彌陀とかゴットとかライフとかいふ者になつて來る。兎に角具體的にすることが宗教意識の特性であるといふことを一たび許す以上は、其絶對界——普通の言葉に寄せて言ふことの出來ないやうな絶對界の有様を何かで言現はさなければならぬ

いとすれば何か具體的のシンボル例之佛とかゴットとかいふ者が必要になるが、そこで若し之を道德の方面と關係さして來て絶對界に於て道德を超越して居ることを言はうとするには善も要用にあらず惡も恐るべからずといふことを言はぬければならなくなる。さう云ふ譯であつて絶對界の真相を道德的のタームを以て具體的にしやうと思ふから今御話したやうな反道德の言葉を使ふ様になると思ひます。併し一方から言ふと先程申した通りベルナルドの言葉の如く宗教は現象界の事相である道德の規定と少しも矛盾するものでは無い寧ろ道德をエルゲンツェンするものであります。然るに何故其反道德の分子が宗教に存するかと言へば絶對界の光景を具體的にシンボルにしやうといふ要求から起つたものであります、これから宗教の反道德的方面も起つてくるので、此の點では道德と宗教は兎に角立場が違ふところから來るのであります。併し宗教の最高理想に達した後

宗教と未來の觀念

にはモウ一遍現象界に下りて來る必要があり宗教は道德的に現はるる必要があるのだから、さうなれば道德も宗教もその極致に於て矛盾すべきもので無いことは明かである。さすれば宗教對道德問題は一時喧ましかつた問題でありますけれ共自分はさう云ふ風に解釋して居ります。有馬君の先程の御話に因んで一寸道德宗教の關係に私見を述べましたのは國民生活と宗教の問題に大關係があるからのこととであります。モウ一つ附加へて置きたいことは有馬君は未來といふ觀念が宗教に必要だと言はれましたが宗教史上で必ずしもさうなつて居らぬ。例へば宗教的天才を有つた人種である印度のアリヤン人種やイスラエルの民族等の宗教には矢張り未來の觀念といふものがその初には無かつたのであります。その宗教は現世的のものであります。イスラエルの豫言者の時代に於きましても尙其思想は恐らく未來的のもので

無くして現世的の考であつた。さう云ふ點からしますと必ずしも宗教に未來の觀念が必要であるといふことは言へぬ様に思ひます。モウ一つ發達した宗教を考へて見るに、印度に於きましては釋尊自身の信仰といふ者は實は無神論であつて又無靈魂説であります。それは直接未來の觀念などに餘り重きを置いて居らなかつた様である。釋尊の信仰は此世界に於て達するところの涅槃である。即ち精神の清い状態とでも言ひまじやうか。さすれば必ずしも靈魂輪廻の考とか未來にどうするといふ様な考は無かつた様に思ひます。さうして見ると未來の觀念が宗教に必ずしも必要であるかどうかといふことは餘程問題では無からうかと斯う思つて居るのです。

それから宗教が國民生活を破壊するといふやうな御話もありましたけれ共さう云ふ例も無論ありませう。しかし必ずしもさうばかりではあるまいと思ふ。寧ろ反對に宗教に依りて非常に國民生活を鞏固

にして行く例は宗教史上決して少く無い。彼イスラエルの宗教の例を考へると明瞭であります。紀元前十三世紀の頃摩西がイスラエル國民を作るに何に依つて作つて居りますか。是は、宗教思想が根本になつてイスラエル國民を作つてゐる。又モーゼの國民的宗教から預言者の倫理的宗教に進んで來る上に於てそのエホバと云ふ神に關する内容は變つて居るけれ共、矢張り宗教が中心になつて國民の團結を努めました。此點より言へば宗教が國民の團結即ち國民生活を纏めたに付て大に力があると思ひます。當時イスラエル人は非常に小さな土地を占めて居つたが、片方に於ては埃及といふ大きな國、片方に於てはアツシリヤ、バビロニアといふ大きな國があつて、所謂敵國外患中に挟まつて苦しめられて居つた。其間に立つて彼が國民生活を維持し少くとも維持し得た所以はエホバの信仰が國民を團結させたからであらうと思ひます。エホバはイスラエル國民の神である、

イスラエル人はエホバの寵民であると考へてその國民を團結させる
セメントはエホバ神である。それから印度の方の例で考へても佛教
が必ずしも印度の國民生活を破壊したといふことは斷言し悪い。却
つて佛教が無かつたならば印度はモウ少し早く破壊したかも知れぬ
詰り厭世的な出世間的の思想が印度人の特色でありますから其の國
民生活は今少し早くディゾルブしたかも知れませぬが、却つて釋尊は
婆羅門等の考へた思想よりは健全であつて其の意味に於て世間道德
に近い教を布いて置かれた様に考へます。例へば法華經などを讀ん
で見ると道德的に健全な教を非常に多く布かれて居る、無論印度人
は古いツバニシャッドの昔から出世間的でありますから如何に英雄
でも矢張り時代の影響は免れぬ。釋尊でも他國々の者に比ぶれば出
世間的でありませうけれ共印度一流の全體の思想から見ると餘程道
德的で健全な所があつた様に思ひます。それは唯今申上げたやうな

經文を以て證明することが出来ると思ひます。其意味から言へば婆
羅門風に依つて段々國民的生活の力が弱くなつて行くのを佛教が幾
分かその大勢に抵抗して道德的に健全な教を布いてさうして幾分か
それを喰止めたやうな傾きが有りはせぬかといふ考を私は有つて居
ります。支那に現はれた佛教は國民生活を破壊したと云ふ御話もあ
りますがそれは國民の成立が違ふから仕方がない。支那のやうな現
世的であつて國家的政治的人民と印度一流のやうな思想の中に湧い
た佛教とは起りが違ひますから仕方がない。併ながら何處の國に這
入つても元との宗教は忽ちナチュライズされてしまふものであり
ます。佛教は支那の儒者や或は老莊の考に依つてナショナルライズ
若くはナチュライズされて居る、併し又一方では外國に這入つた
若くは劣等の民族に這入つた時には、進んだ民族の宗教である佛教
の如きは非常な感化力を與へたことも事實であります。例へば佛教

が這入つた有様を考へて見ると西藏は蒙昧野蠻の時代で佛教が這入つた時に人身御供ヒューマンサクリアイズの如きものが行はれた所が佛教の高僧蓮華生上師の如き人が佛教の博愛的思想若くは博愛的道德の主義からヒューマンサクリアイズの如きものを全く止めて仕舞つたことがある。其意味に於て矢張り西藏の國民的道德的生活は宗教が大に助けて居る。西藏國民の道德的生活の進歩に與つて力ありといふことも一方から言へるのである。併し其佛教も忽ち西藏に於て西藏化されまして非常に變形した喇嘛教になつたので、這入つた當時は活潑々地の勢を以て彼を德化して行つたとは確かでありませぬ。それはホンの附たりでありますけれ共感じたことを一言述べたのであります。

學
宗教と哲

成申さざるを得ないのであります。が先程の御話中に佛教、殊に日本などに行はれて居る佛教各宗は無論宗教である。殊に自分の家が曹洞宗の信者であるといふやうな自分の例を引て御話になつて面白く感じました大體の御意見は賛成であるのです。が、一つ問題を提出したいのは若しも吉田君の如く宗教を解釋するならば原始佛教殊に釋尊の無神論、無靈魂説の如きは佛教の宗教といふ方で無く哲學とか何とかいふ方面に入れて仕舞はなければならぬことになりませぬが一方から言へば私はさうであらうと思ひます。けれ共どうでせうか爰に一つ疑問を提出したいのであります。兎に角釋尊といふ人は矢張り一方から言へば宗教のフアウンダーでありましてそれを大哲學者のみに入れて仕舞ふのも構はないけれ共多少アードトラーリーな考と思ひます。釋尊も矢張り一方から言へば宗教のフアウンダーでありまして其人の考をも矢張り網羅する様な宗教の概念を得て來

る必要は無らうか、得たくは無いかと云ふ要求があります。又更に吉田君の宗教の概念と少しも變らないで釋尊の信仰をも宗教と見る方法はあるまいか、斯う云ふ問題が起つて來はせぬか、少くともさう云ふ問題をそこに提出したいと思ふ。

それからして私は吉田君のオウソリテイのことは嘗て哲學雜誌で大分喧しく論じましたが、宗教の必要なものであるとは確かでありますが、併しオウソリテイも進歩いたしますから、例へば豫言者がオウソリテイとして居つた所と猶太教になつてからのオウソリテイとは違ひます、又基督教になつてからも違つてます、オウソリテイは宗教の進化と共に進化しますからして、さう云ふ點から考へれば成程一方から言へばオウソリテイといふものが有れば人の頭を頑迷にするといふことは確かでありますけれ共一方から言へばオウソリテイも進化して行くから其意味から考へればオウ

ソリテイが宗教に有つたからと言つて必ずしもさう障りが有ることでは無いと考へます。

それからして是は寧ろ御尋をしたいのでありますが、カトリシズムは今日原始基督教を代表したものだといふ御話がありますけれ共、一方から考へまするとカトリシズムはロマナイズした即ち羅馬化した基督教で基督教とは違ふのでは無からうかと考へます。基督の基督教は非常にシンブルでありますけれ共カトリシズムは非常にドグマを有つたものであつてカトリシズムは基督教を羅馬風に化した、ロマナイズドクトリスチャニテイと言ふべきものでは無いかと考へます。基督の基督教はシンブルグードタイチングスでありますけれ共カトリシズムは所謂ニカヤのドグマを以てドグマタイズされたものであります。随つて私の考では基督の教にはドグマは無かつた。寧ろ非常に熱烈な非常な信仰があります、そはシンブルエ

ヴァンゲリオンでありましてラシヨシネーションやドグマは無かつたと思ひます。

文學士 吉田熊次

加藤學士
に答ふ

唯今の質問に答へます。御親切に私に對して御批評を下されましたから私は或一部分批評の御禮を申すのであります。御質問の要點は三つあつた様に思ひます。第一は釋迦も大宗教の一の祖師であるから其釋迦の教も亦宗教といふものの定義に入るべきぢや無からうか又入れたいでは無からうといふ御質問でございます。成程私も入れたいのであります併し何分概念の上より決定して行きますので若し私が概念をさう極めますならば釋迦のやつて居ることはどうも宗教といふものに這入りさうなもので無いと考へます。それ以上の御細工は専門家たる加藤君に御依頼したのであります。第二の御質問はオウソリテイーは時に依つて發達して行くからして是も宗教の

困難とならぬであらうといふ御質問でありした。是も御尤もであります。併ながら私が解して居る所はオウソリテイの發達はオウソリテイの内容を異にして行くものである。教義の内容を異にして居るものであるから或教義が發展して他の形を取れば矢張り他の一つの宗教となると解釋したのである。猶太教から基督教が進歩したならば猶太教の關係はありますけれども其別な宗派として基督教が起つたやうに、若し基督教といふ者より更に脱化した別な内容の教義を以て成立する宗教がありますならば別な宗派になると考へます。さうなれば少しも困難は無いが、唯、同じ宗派の名稱を持つ上に困難が伴ふといふ考であります。それから第三に羅馬教を以て原始基督教に最近の者とするに付て御質問がございましたが是は私の専門外のものでありますから唯、加藤君の御批評に従ふ考であります。唯、私の申上げた理由は原始基督教では一つの神の國といふ者を信じそれ

宗教と道徳

を實現したいといふ動機から始つて而してその神の國といふものに對して着實なドグマを置いて忠實にそれに従つて行つたものである。而して羅馬教會が執つて居るものは原始基督教の執つてをつたものの外には無いのであります。その歴史的研究の結果、果してそれに近いものか近く無いものかといふことは一に専門家たる加藤君の御批評御裁斷を願ふ次第であります。それだけが御答の積りではありませんが、なほ私が加藤君の御話の中でチョット腑に落ちないを申上げたい。それは宗教と道徳との關係に付ての御話でありまして宗教と道徳とは畢竟矛盾しない。即ち相對界の間の極りを絶對界の先で見ると宗教であるのだから宗教と道徳とは互に補充し合ふれば共矛盾する者で無いといふ御話であります。私も此御説は一理あると思ひます。即ち宗教家が宗教の立場より道徳を見ると加藤君の言はれたやうに道徳の教を宗教の光と見るのでありますけれども共さう云

ふ風に宗教家が道徳を見るのであるといふことは道徳と宗教といふものが矛盾しない衝突しないといふ論にはならぬと思ひます。何故なれば如何なる道徳を神の命に従ふ道徳であるかと認める事の狀態に依つて實際生活上で道徳と看做されて居る者が神の光に照して道徳とすべきかすべからざるかといふことの判断が違つて來る。ですから現在私共が假に科學的學問的研究の上に立つ道徳の極りが神の眼より見てもそれは道徳であつてそれを守る者が即ち神を愛する所以であるといふことになるか。そこになると道徳と宗教とは二つの者で必ずしも衝突せぬ調和して行き得るのであります。けれ共其神の教といふものは我々の實際生活に於て取るところの道徳即ち實際上、經驗上、科學上の道徳に従ふを以て神の教に従ふ所以でないと看做す場合には其間にどうしても、デイスクレパンツが生じて來ると思ひます。之れに依つて千八百九十三年にギジンキーの發し

た第二の問即ち宗教と倫理とは如何に關係するかといふことに付て種々な返答があつたのであります。多くの人の答は斯うであつたと思ひます。尤もそれは其人の執つて居る學說の立場より違ふのであります。が先刻申しました第一種類の人は即ち新教の神學者の意見では宗教といふものに無關係な道徳は無論有るけれ共眞の道徳は宗教といふものに依つてしなければ成立することは出來ぬものであるといふ解釋であります。是は基督教の神學者若くはその牧師といふ立場から見ると正當の解釋であつてさう云ふ確信が無いならば自分が其職に安んじて居ることは出來ぬ譯であらうと思ふ。基督教には一定の信仰箇條がある、それに従ふことが絶対に善なるものとする既にこれに従ふことが善なりとすれば總て我々の善とすることが信仰箇條と一致するもので無ければならぬことは當然のことと思ふ。ヘンチングの如きも宗教以外に道徳のあるといふことは當然なこと

してそれを認める。ヘフデングは公平に其間に斯ふ云ふことを附加へた、併ながら世の熱心なる基督教信者はさう云ふ種類の道徳を眞の道徳であるといふとは看做さぬであらうといふことを附加へて居ります。私はそれも亦一理あることであると思ふのであります。若し其道徳の動機又はその道徳といふものが神の光で照されないものであれば眞の道徳と彼等は看做さないであります。若し神の光を以てその道徳を照した内容が信仰箇條と一致しない時には矢張り實際の道徳と宗教上の道徳とは一致せざる場合が生ずるのは當然と思ひます。それでありますからその一致するといふとは一つのポッシビリティである、そのポッシビリティを實現することは私は熱心に希望する。又それが將來出来るならば非常に幸福なことと思ひます。其、單に宗教そのもの、性質より生ずる道徳と世俗的道徳と必ず常に一致するものであると云ふ樂天的の解釋はどうも私は事

實に當らぬと思ひます。若しさうであるならば何も宗教と道徳との関係はどうだといふ議論も起らぬ譯であるのに實際其間にデイスクレパンツが起るからかゝる議論も起ると思ひます。それでヘフデングが言つて居る言葉に哲學上の論も或は宗教もさうであります。が、多く唯、説明である。ですから事實とは直接に關係を有たない、例へば我々が日常食つて居る食物が總て毒であるといふ學説が立つた所で實際それを食つて生きて居るならば食つても構はない、説明は何處までも説明であるから説明に依つて事實を變へることは出来ぬ、と云つて居る。我々が日常食つて居る食物は毒であるといふ説明が説明として間違つて居るが如く、實際上我々の正當であるといふを研究の結果として認められた道徳を以て、それが單に不道徳だといふならばそれは間違つた説明であります。けれ共實際間違つた教を其宗派が執つても、そのドグマに従つて行くこそ眞の道

徳であるといふことを教へる宗教家が有つても、矢張り宗教として
は一點の缺くるところは無い。唯、其宗教が果して直打が有るかどう
かは問題であります。要するに宗教と道徳とは矛盾せざるを得る、
その矛盾せざるやうにならんことを私は熱心に希望することは前に
申した通りであります。常に一致して居るといふは餘りに樂天的
の解釋であらうと思ふ。

文學士 加藤 玄 智

有馬君は僕のは宗教的道徳だと云はれますが佛教の戒律や猶太教徒
の僧法トラーの如きものを宗教的道徳と云ふなら、僕のはさう云ふ
のではない。僕は唯日常の道徳、平常の倫理も宗教の中に生活した
者に、より多く、容易く、實行し得るのであつて、宗教家たる保羅
の「我等彼により信仰に由りて今居る所の恩に入るとを得且つ神の榮
を望みて欣喜をなす唯これのみならず艱難にも欣喜を存せりそは艱
難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は羞を來ら
せざることを知るこは我等に賜ふ所の聖靈によりて神の愛我等の心
にそゞげばなり」(羅馬書の五)と云ふのも、儒教が素富貴行乎富貴、素
貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素艱難行乎艱難、君子無入而不自得

焉(中庸)と云ふのと少しも違はないので、有馬君の様に僕のを宗教的
道徳と云ふ特別の言葉で呼ばれるとすぐ戒律の様なものを感じて
來て少し語弊がある様に思はれます、私のは決してさう云ふ意味で
はないのです。

又吉田君は基督のイミヂエート、セコンド、カムミングを信するのが原
始基督教でそれが直ちにカトリシズムだと云はれましたけれども、
それは事實に反すると思ひます、基督のイミヂエート、セコンド、カ
ムミングがイリユーションであることを知つたから次第に原始基督
教がカトリシズムに轉化したのだと考へます。

文學博士 浮田和民

兼て有馬君から此協會の御話を承はつて居りまして承知して居りま
したが、今夕此會が有らうとは實は豫期いたしませぬでした。併し
此御集りに圖らず罷り出た譯で、誠に有益な御話を承り、甚だ諸君
に感謝する次第であります。

唯今國民生活と宗教といふことの問題に付きましたは兼て私の考へ
て居つた事もありますから本問に對して少しく述べて置きませう。

私の宗教とするのは矢張り哲學と其對象は同じものであると思ひま
すが、宇宙の全體若くは宇宙の根本に對する智的概念に止る間は是
は哲學である。其概念が感情に現はれモウ一步進みましてそれが意
志の活動にまで實現し、宇宙の根本或は宇宙の全體に對する所の信

仰希望及び慾望となつて實現する時に私は之に宗教といふ名を下したい、又其中に宗教の事實があると斯う定義を下すのであります。斯う定義して行けば大概總ての宗教を包含する事が出来るかと思ふ。此信仰を以て或は此信仰希望若くは欲望を以て宗教とすれば、私の考では國民的生活の基礎になると思ひます。是なくしては所謂健全なる國民的生活は成立たぬかと思ひます。歴史的には今加藤君の御述べになりましたことに依つても能く分るやうであります。私は社會組織の根本にはどうしても共同の意識が無くちやならぬ。否すんば社會組織は成立たぬと思ひます。人間社會の最初に於ける共同の意識は所謂マイノロジー、我々から見ると神話である。併し其當時の人の所謂宗教であり哲學であり、サイエンスであつたと言ふことが出来ます。此共同の思想で最初の人間社會が出来た即ち歴史の初に現はれた國家は實は宗教に依つて成立つて居ります。天竺に於

ける國家は天竺全體を統一するとは難かつたのであります。が婆羅門教の思想は中世歐羅巴列國に於けるが如き感化を印度の古代に於て及ぼしたのであらうと思ふ。中世に於てもカトリック教が非常に列國の起る基礎になつた。今日こそカトリック教は國民生活の發達の妨害になつて居るのであります。是も時代に依つて違ふとで中世に於てはカトリック教が國家組織の唯一の勢力となつて居つたのであります。それで今日の時勢は不幸なには宗教が段々化石のやうになつたとであります。昔の宗教は人間社會を進歩發達せしむる要素でありましたが今日の宗教は社會を保守し保存する一勢力となつて之を進歩せしむる役目はサイエンス若くは哲學若くは藝術に譲つて居ります。基督教に舊教あり新教あり、基督教ばかりで無く、佛教にも舊佛教あり新佛教ありといふ様なとで互に衝突し又た科學若くは哲學と衝突する事になり、それに國際上の交際が頻繁になり

ました爲に種々の宗教が相衝突して居るのであります。一方に於てはサイエンス若くは哲學と宗教が衝突し又一方では宗教と宗教と衝突するといふやうな事になつて、多くの人はどの宗教が宜いか分らず、宗教は何れも人間には必要で無いといふ様な結論に至つて居る者もあります。大體に於て私は宗教の個人及社會に於ける結果は吉田君の述べられた通り個人として又社會として意識の統一を保ち又其結果として信仰を生じ希望を生じ活動に至る大勢力であると思ひます。人間社會の統一といふやうなことは固より宗教で無くては出來ない。又國民的生活の健全なる發達にも矢張り今尙私は宗教が必要となつて居ると思ふ。唯今日は變遷の時代で不幸な場合に處して居るのでは無いかと思ひます。我日本の現状を見ましても法律の力で國家が立つて居るには違ひないけれ共、法律の力ばかりで無い又普通所謂倫理といふものがあつて固より教育などは之によりて行は

れて居りますけれ共、實際日本人民多數の道德的生活は何に依つて最力強く維持せられ又活動して居るかといふと矢張り佛法ではあるまいかと思ひます。日本農民或は商人、職人は今日東洋に於ては一番佛教の信仰の厚い國民である。日本ばかりで無く他國にまで佛教を傳播せしむるといふやうな勢力は、衰へたりと雖も未だ有つて居る國民であります。歐羅巴の如きは宗教が衰へて居るといふに拘らず、種々なる教會が世界中に外國傳道をやつて居るのみならず、實際是等の宗教は今尙多數の人民を支配して居る。今に國民的生活の大部分は宗教で持つて居るかと思ふ。スペイン若くはミル、ハツクヌレー等は所謂モダンカルチュールで一宗を立て、居る。日本では武士道の觀念で一身を持して居る人も少からぬと思ひます。けれども其大多數はどちらかといふと尙宗教に依頼して居ると思ひます。私の考では宗教は人間として第一必要である。其次には國民生活の上

にも必要であると思ふ。然るに今日宗教は相互に衝突して居る此衝突は不幸な事實である。之が爲に宗教の効力は少くなり之が爲に宗教の國民的生活に及ばず影響も減殺せられて居る。出来るならば此宗教の統一といふことを出来るだけ我々の力の及ぶ限り謀るといふとは社會の爲にも亦人類の爲にも必要である。専門の議論に涉らずして私の是まで理會し得る限りでは儒教と基督教と佛教の根本的概念は既に倫理的に符合して居る、調和を待たずして調和されて居る、唯其根本の原理に本づいて修養の方法は各々違ひますけれども其根本の概念は同じことかと思ふ。又宗教的敬虔も相互に心術を打明けて話したならば餘程一致し符合するかと思ひます。成る可く各宗派の異同を少くして宗教上の争を出来るだけ少くするやうにすることが國民的生活の助けになる、さうして殊に今日の青年の煩悶を救済する様にしたいと私は希望する次第であります。

宗教と教育

日本では宗教と教育とが分離して居ります。是は今日の時勢としては必要なことであると思ひます。拘らず少くとも私の希望だけを言ふと佛教、儒教、基督教だけは國家が公認して此三教の基礎に立つて居る倫理だけは各學校に於て自由に倫理の基礎として教へさせたいと思ふのであります。若し今日の儘で宗教と宗教と衝突し若くは宗教とサイエンスと衝突し而して一方に於て日本が戰勝國の勢に乗じて非常に實業が發展するやうな事になりますれば或意味では今より一層國民的道德は墮落するかも知れぬ。一時兎に角墮落するであらう、亞米利加に於けるが如くコンメルサルイズムの勃興を見るとに勢ひなると思ひます。既に其兆候は現れて居ります。そこで此際道德は非常に社會共同の生活に必要であります。宇宙の根本實在の本體に對して堅い信仰と希望を持つて居ないといふと倫理の基礎が薄弱であります。私一己の希望は宇露士或は佛蘭西等に於けるが如

き倫理的宗教は兎に角宗教としてゝは無いが徳育の根本として之を公認したいと思ふのであるけれ共是は私一己の考であります。日本國民從來の歴史的事實からいふと先づ今日一番弊害の無い仕方と思ふのは儒教を成るべく近世の科學と調和せしめて儒教を復興せしめ之を復活せしめて大に國民的生活の基礎にするにであります。私一己の希望を言ふと儒教佛教基督教三教を平等に公認し、其宗教を基礎として居る倫理道德を國家が公認して用ゐることが必要であると思ひます。若しそれが行はれぬとするなれば儒教を基礎として今後大に儒教の復興を謀るといふ方法の成立たんことを希望するのでございます。曾て丁酉倫理會でも同じやうな説を述べたこともありますが重ねて同様の意見を本會の前に提出して御参考までに申して置きます。

文學博士 三宅 雄 一 郎

浮田博士
を駁す

宗教と國
民の歴史

色々承はりましたが、宗教の概念が區々でありまして浮田さんの言はるゝ様な廣い宗教の意味ですと吉田さんの方でどう思ひなさるか少し惑ふのであります。私の考へでは宗教は國民の歴史と伴つて來て居つて、その社會が進んで行く時は宗教はどれ丈けかそれに預つて助けることもあらうし又止めることもあらう。宗教が國民的生活に何等かの効力を與へやうといふことを望むのは一つの力になるかも知れませぬが、今の處ではさう云ふ望といふことを或一の出來事と見るのであります。それが無くても進む社會は進んで行き衰へる社會は衰へるのであります。その中で銘々自分の善いとする處を務めるのはその進歩に預ることになりませうが、局外から見ます

とさう大した関係の無さうな事もあります。浮田さんの御説は此儘で行けばコンマーシヤリズムになるといふとありますが、米國の方では宗教の信仰が日本より餘程下つて居るとの御説でありますか、其宗教の信仰といふ意味がどれ位のものでありますか、確かに了解することが出来ぬのでありますが、表面に現はれたところでは傳道運動に於ては米國も可なり盛んである、大分盛んなやうである。日本より盛らしく見えますが、それでも浮田さんの怖れなざるコンマーシヤリズムは向ふが先きに盛んになつて居るといふとでは、どうもこの先き宗教に努めるとして如何がなものでありますか。基督教も佛教も儒教もどうも互に喧嘩して科擧にも反對するといふやうなところがあるとしては、之を守り立て、善くしやうとしても果してそれ丈けの効が有るか。それは歴史上の事實とすれば浮田さんの御手のものでありますから先づ確かなものになるのですが、未來のこと

宗教にのみ
は情なし

になりますると先づ歴史を離れて居りますから必ず浮田さんの思はるゝ通りには、……(笑)未來ではさう宗教に依頼して居るべきであるか、宗教は在來りに任かして、又それに關係して居る人が銘々思ひ思ひに善くするに勉むることが全體を善くするに預るべきものであります。それが、それに手頼つて、それで無ければ此社會の進歩がどうなるか分らぬ、悪くなる許りのやうに心配するのは、事實に於てどうでありますか。先づ各々善くしやうといふ念が餘程預かるのであつて、他は之に附屬するであらうと思ひます。總て宗教に手頼つてそれではなければいかぬといふやうなことは情なく心細い譯であります。此社會はタツタ宗教位でどうするといふやうなものらしく無い。どれ丈けか影響は有るにしても色々なファクトルがありますから僅か一つの宗教丈けをさう手頼る程のもので無からうと思ひます。さうかと言つて特別にそれが悪ければどれ丈けか實になりますので、少

神佛はあ
りがたく
なし

しも實の無い方が宜しうございますから、折角善くなることは望みますすけれ共、どうも私はそれ程大事に思はぬのであります。私の立場として宗教の概念はどう極るか知りませぬが、是までの説明のやうでは神でも佛でも餘り難有く感じにくいのであります。是まで煩悶といふやうなことも色々聞きますすけれ共、若し煩悶とすれば私の考へでは此の宇宙、地球の百萬倍もある者が一億もある。さう云ふ宇宙の下に廻はつて居る極めて小さな地球に居る人生、實に有つても無くても分らぬやうなもので、或時代が経てば消えて仕舞ふとに分つて居る、それが何であるかといふことになれば煩悶となる價值があります。先づ其の大なる宇宙から解せねばなりません。世間では人生といふことに就て煩悶して居りますが、實際眼前に現れて居る一億ばかりのものゝ中で、有るか無いか程のそれが何であるかといふ様なことは宗教の方で説明を與へぬ、與へても極めて不充分で

神佛は蟲
蟻蛭同様

あります。唯そは神とか佛とかいふ者がどうした、かうしたといふことになつて居りますが解釋次第ではさういふ神とかも虫蟻蛭より價の無い様な心持がするところがあります。何か別に説明があるべきで有ると思ひます。宗教がどうかして一變するならば兎も角是までの宗教といふものは先づ私の處では餘り有用でありませぬ。けれ共色々な人が世間に居るので是までの宗教で澤山とする人があればそれも宜うございます。宗教に關係ある人は精々努めるが宜しうございませぬ。悪い事でない限り何でも努めるが宜うございませぬ。私自らとしてはどうしてもさういふ宗教に縁の無い度す可からざるものであります。是丈けのことを申し上げます。

法學博士 浮田和民

三宅博に
答ふ

テヨツと今の御話に付て一言致します。實は私の言ふ宗教と三宅君の宗教とは固より違ふて居るといふことは會員諸君には御分りであらうと思ひます。普通の所謂宗教即ち迷信としての宗教に對しては私も三宅君と同感同説であります。同じ言葉で私の感情を、今三宅君が御述べになつた通りに、普通の宗教に對しては述べる事が出来る次第であります。唯三宅君は普通の意味で言へば無宗教の位置に立つて居ると自ら思つて御出でになる様であります。私の見る處では三宅君は一種の宗教家であると思つて居ります。願はくは三宅君の様な信仰を總ての人間に有たせたい。どこまで行けば倫理の基礎が鞏固に成立つ。遺憾ながら三宅君と同一なる信仰希望は普通の

人間には未だない。所謂儒教佛教基督教の根本の思想は三宅君は善く代表して御座るかと思ひます。先づ宗教といふ定義を廣く下すことが必要である。從來の宗教ではいけない。所謂サイエンス及哲學と調和して復活したる一新したる儒教か佛教か基督教で無くてはならぬと思ひます。過去の基督教、過去の佛教、過去の儒教を其儘今日用ゐるといふとは出来もせず又それは希望すべきとて無からうと思ひます。唯、宇宙全體に對する三宅君の如き信仰を基礎として如何に國民的生活に之を實現することが出来るか、所謂武士道では行かないといふのが平生私の持論であります。私の言ふ宗教では儒教が一番在來のものでは宜いと思ひます。若し之を少しく外の言葉で言へば私は儒教的基督教といふやうなものを鼓吹したいと思つて居るのであります。一つ三宅君のやうな信仰を持つて來て、それが社會共同の概念となる様にしたならば國民的生活が鞏固になり、而して

今日將に發達せんとする青年男女の無用な煩悶を幾らか救済する
が出来来る。或意味から言へば世の中は抛つて置いて進歩する時
は進歩し、退歩する時には退歩する者であります。又宗教ばかりで
世の中を救ふとの出来ぬといふことは三宅君の御説の通りでありま
すが、我々各自の理想を以て能く爲すといふ信仰と希望と欲望は必
要であります。その欲望を無くして仕舞つては國民生活はどうして
も發展せぬと思ひます。此際どう云ふ方法にして行つたら宜いかと
いふのが私の疑問で、それに付て何か考案があるならば御参考にな
らうかと思ひ愚説を述べました次第であります。

文學士 吉田熊次

浮田三宅
兩博士に
答ふ

浮田さんの御説に三宅先生の御注意がございまして、さう廣く宗教
を見るならば私がどう思ふかといふことであります。若し浮田さ
んのやうな定義になさるならば私は浮田さんと實際に於て全然同意
見であります。些とも宗教と道徳、宗教と教育との關係について困
難に遭遇せぬことであります。その趣意を通して行くとは實際どれ
丈け効能が有るか無いか知らぬけれ共私は必要であると思ひます。
唯一言私の考へて居る處は若しさう宗教を定義するならばそれ以外
の哲學といふ者は實際どれ丈けあるか。單に冷靜なる論理の塊りと
いふやうなことのみに即ち智の方の結論丈けを哲學とする御説でご
ざいますけれ共、人間の精神作用の結果はその智の方面に於て鞏固

に結合した者はそれと同時に感情及意志に縁故を持たぬであらうか、是は別問題でありますが、私は思考に長じた人に對してヘルバルトの説のやうな心理事實があるといふことを信じて居ります、即ち觀念の上で充分なる統一があり、何等か系統の立つた人が同時に感情の上にもその主義があらはれて來るのである、又意志の働きの上にもそれが影響を及ぼすことになるのである。もう一つこゝに御注意に申して置くことは、浮田さんのやうな定義にするといふと今日の學校教育に宗教が無いといふ斷定は適當で無い。何となれば此意味の宗教は私の考では今日と雖も多少學校教育に有るもので、學問する社會に於ては少くとも通常の場合にはこの意味の哲學は有る譯と考へます。この意味でない宗教即ち私の所謂宗教を學校の道德教育の上に加へたら宜からうといふ御趣意でありますならば、それは私の見解が違ふのであります。尙色々精しい事は別に申上げなければ明

瞭いたしませぬが、此宇宙に對する見解は寧ろ個人的のものと思ふ随つてそれを全般に陶冶する學校に及ぼすといふことは必ず何處かそこに反對なる分子を入れることになる。普通道德でいふ哲學的基礎或は浮田さんの言葉で言はれる宗教的基礎を持たすといふとは必要であるがそれは如何にしてやる可きか、學校外でやるべきか學校内でやるべきか、學校内でやるにしても如何なる時期に如何にしてやるべきかは大に研究を要すると思ひますから、結論文け申しますならば、其點に於ては浮田さんに御同意は致兼ねるのであります。けれども一般に倫理を一層深遠なる意味を有つやうにするとは必要と思ひます。殊に宗教に従事する御方などからさう云ふ事は爲て頂きたいといふ希望を有つて居ります。大體は浮田さんの御希望は非常に愉快に感ずる次第であります。又三宅先生には無論全然御同意でございますから私もそれに加盟して三角同盟を作るとを希望いたします。

問 (三宅博士) 意識を統一して弊を省くことは理論では行くが事實いけぬ。

答 (吉田學士) 論理上考へられることと事實さう行かうといふとは二つの物でありますければ共、若し内容を正當に取つて來る宗教が有るならば、又は新しくさう云ふ宗教が起るならば、それで以て其宗教が意識を統一して、また弊もない……

問 (三宅博士) 一つに統一して其の事が動かぬものとしても行けるのですか。

答 (吉田學士) 内容をラシヨナリーに取るといふことに依つて弊害は出來ない譯と思ひます。例へば悪い教を教へなければ悪い事を信仰の基礎として見はさぬのでありますから、理に合つたことだけ教へましたならば其理に合つた丈けを守る譯である。

問 (三宅博士) 時々變る譯ですか、變らずに行けるといふのですか。

か。
答 (吉田學士) それでは、らチャンと宗教が成立つた以上は變らないのが本則であらう。

問 (三宅博士) 變らないもので統一して、ズツと弊なしに行けるといふ論理がつくですか。

答 (吉田學士) 別な宗教でも持つて來なければいけぬのであります。古い宗教に若し固執しましたならば健全なる統一は出來ぬといふ譯になります。

問 (三宅博士) 一つの宗教では論理的にいかぬ譯にならぬか。

答 (吉田學士) それは其の教義が時勢に合はなくなればいかぬ譯でありますから、その宗教は廢類する外はありません。

問 (三宅博士) 時勢に従ふと教義が崩れる、さうすると論理がたふぬのぢやないか。

答 (吉田學士) 私は又教義を新しく立てることも可能と認めて行くのであります。即ち理論としては教義をその時勢の思想の進歩と併せて行く原教もあり得ることと思ふ。

問 (三宅博士) その新し、といふことも當分の事でないか。

問 (中島博士) 歐羅巴にては宗教を何時までも一つのものと見て置いて解釋を變へて行くのですが。

答 (吉田學士) それが巧く行けば宜いのです。

問 (中島博士) モウ一つは私はマア宗教といふものは概してアナタ方見たやうに論理的に考へる人ばかりになれば要らなくなる、が、そんな人は世の中にさう居らぬ。それで少しイロヂカルでも構はぬ、ロヂカルといふ事はそれ程大切な事と多くの人は感じない。唯少々古びて居つても行けるのですが。

答 (吉田學士) それは自己に矛盾を感せぬ限り個人としては統一

をするだらうと思ひます。

問 (中島博士) 五百年も過ぎたらいきますまいが、二百年か三百年位では大概の人には、例へば亞米利加の例を取ると黒奴の宗教と白人種の宗教とは餘程違ひます。片方は餘程古い者で行つて、ロジックはいかぬですから論理的の統一も大變必要ですけれ共論理的に行つたら宗教の力は衰へて仕舞ふのでありませう。論理の方ばかりに傾いたら宗教の効能が全く無くなりはしますまいが餘程弱くなります。プロテスタントの方が弱いといふのは其處であります。日本などでもさうではありませぬか。論理的宗教として力が弱いではありませぬか。

問 (三宅博士) さうすると弱いものが悪いことになるのか、善いことになるのか。

答 (中島博士) それは立場に依つて善いとも悪いともなります。

唯、人類を統一して行くといふ方から言へば宜いかも知れぬが、人類が進んで新たな方面に向つて進んで行くといふのには困るでせう。

問 (三宅博士) 先きで進んで行くものと見ると……………

答 (中島博士) それは困る。抑へて行くといふことが主になつて居るのは、治めて行くといふ側には宜しいかも知れませぬ。

物質的生命
精神的生命

文學博士 福來友吉

人は五尺の小體を以て無窮の天地に呼吸して居る。行くも、住まるも座するも臥するも、誰あつて之を妨害するものも無い。無形の天地は人の無代價で之を私有するに任せてある。併し實際に於て、天に踏み地に踏して、渺たる一小軀の置き所に窮する程此の無邊際宇宙を小く感ずるものあるは、全く其の人の心柄であらう。蓋し心柄如何によりて生命に精神的と物質的との二つが出来る。天地にも此二つがある。無論物質的天地は何人に取りても無窮である。併し人は必ずしも其の全部に於て精神的生命を認めて居らぬ。人は此の物質的に無窮なる天地の内、唯精神的生命を認め得る丈の範圍を自己の精神的天地と感じ、其處に精神的空氣を呼吸して居るので

ある。夫れより以外の天地は物質的天地であつて、其處に見出さるゝ呼吸は單純なる肺臓の生理的呼吸にすぎぬのである。世には精神的呼吸の絶へたる屍體を以て酸素と窒素との混合氣を生理的に呼吸するに止るものが出来る。宗教は此の如き屍體に精神的呼吸を復活せしむることを目的とするものであらう。

甘黨でも酒を飲んで辛しと感ずる。辛黨でも菓子を食べれば甘しと感ずる。併し唯單に辛しと感じ、甘しと感ずる丈では、夫れは酒と菓子との物質的世界に住んで居るのである。酒の辛さに趣味を感ずる時、酒の味は精神的世界のものとなり、菓子の甘さに價值を認むる時、菓子の味は精神的生命を開くものとなる。故に甘黨も、酒を飲んで其の辛さを感じ以上は、菓子と酒との物質的世界に住みて居るのである。辛黨も、菓子を食して其の甘さを感じる以上は、酒と菓子との物質的世界に住みて居るのである。甘黨と辛黨と、同一の

物質的世界に生命を保つて居る。即ち味覺の物質的生命は同一である。然れども甘黨は獨り菓子の味覺世界に趣味を感じ、辛黨は獨り酒の味覺世界に價值を認む。趣味と價值とを感じたる場所丈が人々の精神的生命を享けて居る所である。趣味も感せられず、價值も認められざる所には、唯物質的生命ありて精神的生命なし。故に酒と菓子との物質的世界の中、辛黨は酒に於て精神的に生息し、甘黨は菓子に於て精神的に生息す。味覺は酒と菓子との外に尙甚だ多い。人は之を経験し得る丈の範圍を盡くして味覺の物質的生命を擴めて居る。併し其の中にて、精神的生命を享くる所は、僅に趣味と價值とを感ずる一小部分に限られて居るのである。

物質的天地は万人に共通して無窮に廣い。味覺世界の物質的廣さが、甘黨にも辛黨にも共通して居ると同様である。然るに、甘黨は物質的に廣き味覺世界の内、唯菓子の範圍内に限られたる精神的生命を

感じて居るが如く、又辛黨は物質的に廣い味覺世界の内、唯酒の範圍内に限られたる精神的生命を感じて居るが如く、人は無窮に廣き天地の内の一局部に限られて精神的に呼吸して居るのである。金錢を愛する人は、金錢を得る間のみ、此世界を住むべく價ある所と感じて居る。名譽を愛する人は、此世界を名譽を得る爲めに住むべき所と思つて居る。名譽が亡びても、金錢が無くなつても、尙物質的世界は依然として無窮に廣く彼等を包圍して居る。併し此の如き世界は彼等にとつて趣味のなき世界である。價値の無き世界である。價値もなく趣味もなき世界が無窮に廣ければとて、其の廣きことが精神上如何程の意義あるであらうか。趣味あり、價値ある世界が住み甲斐ある世界である。金錢を愛する人が金錢を失ひたる時、名譽を愛する人が名譽を失ひたる時、物質的に無窮なる天地も、彼等の安住所としては餘りに狭い。

般賑を好み、孤獨を嫌ふは人の性情である。銀座通りへ行けば、天賞堂もある、電車も込み合ふ。夫れで般賑だと人は言ふ。里を離れて深山に入れば、誰しも交際が出来ぬ。夫れで孤獨だと人は言ふ。併し夫れは物質的の解釋である。精神的に解釋すると、般賑とは知己を得た時に初めて生ずる心地で、孤獨とは知己を失つた時の心地である。知己の極致は肝膽相互に照らした時であるが、茲には必ずしも夫程に意義深き場合のみを稱するのではない。夫れ程に意義が深くなくとも、人々相遇ふ時、其の間には自然と肝膽相照した時の様な心地の程度の低きものが生ずるのである。日本人同志ならば途上初めて相遇ふた間柄でも、自ら此の心持が生ずる。尤も其心持の程度が微弱であつて、夫れよりも更に程度の強き同一情念の爲めに壓せられて居るから、人々は之を自覺して居らぬ。之を自覺するところが無くとも、此の如き情念の存在することは外國なぞへ行つて見

た時の心地で證明することが出来る。初めて外國へ行つて、知らぬ異人の間に居る時には、なんだか一種の物足らぬ様な寂寞を感じるとの事である。此が所謂天涯孤客の情で、即ち孤獨の感の一種である。此の如き時に當りて、若し日本人に出會することがあると、其人は日本にある時、曾て見たことも聞いたこともなき全くの他人であつても、恰も十年來の親友或は親戚にでも遇つた様な心地がして、大に孤獨の感を忘るるに至るとの事である。若し日本人同志は單に日本人であるとの思想丈で、途上初めて相遇ふたる時にも己に知己であるのでなければ、此の如き事が無い筈である。日本にある時、此知己の感の自覺されざるのは、父母兄弟朋友親戚等の如き更に程度の深き知己によりて壓せられて居るからである。外國に行つて之を痛切に感ずるのは、本來無かつたものが新に生じ出たのでなくして、本來潜在して居つたものが、之を壓するものゝ無くなつた結

果として明に自覺出来る様になつたのである。此の如き理由によつて日本人同志は己に交際し居ると居らざるとに拘らず知己である。此れは日本人同志に限つた事でない。日本人が初めて外國に行つて、知らぬ異人の間に居る時でも、矢張異人は吾々日本人と同様に人間であると言ふ事によりて己に知己である。之を日本人と比較するから知己の感が稀薄で解らぬ。若し無人島にでも行つて、鳥獸の群に雜り居る時、不圖西洋人に出會したならば、地獄で佛に遇ふた心地がするであらう。人種の異同などを氣にする暇がないであらう。それで人間と人間同志は、其の種族が如何程異つても、御互に人間であると言ふことと思想によりて己に知己である。人間相互の間ばかりでない。人間と下等動物との間にも知己の感が交通する。特に人間と犬との間の交情は甚しいものである。平生の不平の訴へを聴いてくれる人なき時は、之を愛犬に訴へて、夫れで幾分の安慰を

得るものがある。ロビンソン、グルノーも犬を伴つて行かなかつたならば、絶海孤島の生活は更に寂寥であつたであらう。つまり人間は廣き天地間に自分丈獨り居るとを嫌ふ。必ず自分以外の人と共に居り之と精神的交通即ち知己の感を交換せんことを求めて止まぬ。人は食物によつて身體を養ひ、知己の感によりて精神を養つて居る。此の感の起る時、我に對する人は精神上の人となり。此の感のなくなる時、我に對する人は物質の團塊にすぎぬ。精神上の人に對する時、吾人は心中に殷賑を感ず。物質の團塊たる人が如何程多く吾人を包圍して居つても、吾人は瓦礫と共に居る時の如く孤獨を感ずるに過ぎぬ。それで吾人が銀座街頭に出で、殷賑を感ずるのは、往來の日本人に對する自然の知己の感が吾人の精神中に潜在的に活動して居るからである。若し一朝にして此の知己の感が消滅したるものと思へ。銀座街頭は忽ちにして滿目蕭條たる荒野と變現するであら

う。之に反して世界多數人の内に、一人にても真正の知己を得ると見よ。人は之によりて死中に活を得るのである。女は己を愛するものゝ爲に粧ふと言ふ。自分の知己たる夫を得ざる婦人は自分の存在に付て殆ど意義を解し得ぬのである(宗教的信念によりて之を補はざる限り)。士は己を知るものゝ爲めに死すと言ふ。人世知己に感ずとも言ふ。天下の人悉く我を非としても、若し一人の真正に己を知るものを得ば、則ち我は世界を相手にして戦ふ勇氣をも得るのである。其の知己は必ずしも自分の側にあるを要せぬ。身は故國を離れて異域にあるも、遠く天空を望んで、夫の星の下あたりに我が知己ありと思ふ時、之によりて得る所の精神的生命は幾許であらうか。又知己は必ずしも現在にあるを要せぬ。古來其時世に容れられざりし幾多の天才家は、皆知己を千歳の下に豫期して活動して居たではないか。若し彼等は此の希望が無かつたならば、彼等は時世に逆つて天才的

作物を後世に残すの元氣を有たなかつたであらう。若し知己を千歳の下に期することも出来なかつたならば、此の場合人はなんとするであらうか。其の時、人は神に訴ふるのである。訴ふるのは知己を求むる所以である。本來知己を求めて止まざる人は必ず何處かに訴へる所がなくてはならぬ。人は其の胸中を披瀝して先づ父母妻子に訴へて見る。聞かれぬ時には朋友に訴へて見る。尚聞かれぬ時には天下に訴へて見る。尚聞かれぬ時には後世に訴へて見る。後世も期すべからざる時は、是に於て人は神に訴へて見る。神は最後の訴へ所である。最後の知己である。人は神の知己を得て居る限り、天下人衆の凡てより見捨てられても、尚天涯孤獨の感を抱かぬのである。宇宙の一實在として自身を感じるのである。住むべく價值ある所、趣味ある所と此世界を感じるのである。天下人衆より見捨てられても、尚此の如く感ず。况んや里遠く離れて山間僻地に入るが如きことに

於ておやである。彼は常に神と共に居るのである。山の奥、海の果、何處に行つても、孤獨の感に苦むことは無いのである。之に反して、若し彼が神に訴へても、尚夫れでも聞かれざる時には、其の時こそ彼は真正に孤獨を感じるのである。曠々たる天地の間、彼は獨り取り残されたる迷ひ子として自分を見るのである。それでも、物質的に見れば銀座街頭は矢張人馬絡繹として晝夜を別たぬのである。それで般賑と孤獨とは物質上の問題でない。全く精神的交通の問題である。知己の有無の問題である。人は知己を得る時、此の世界に住むべき價值を感じるのである。即ち精神的生命を感じるのである。知己を得ざる時、此の世界は徒に物質的に廣大にして住むに足らぬものとなるのである。

右の外にも、尚右の如き精神上的の現象が幾多もあるのであるが、自分はこの如き現象を列挙して徒に此の論文を長くすることを好まぬ。

要するに物質的に見れば天地は無窮に廣い。萬物は無限に多い。自然は無代價で之を使用することを人に許して居る。此の點に於ては萬人共通である。然るに此の無窮の天地、無限の萬物に付きて、趣味を感じ、價値を認めて居る所は、人々甚だ狭小で、其の程度に於て千差萬別である。而して趣味を感じ、價値を認める所が、即ち精神的生命のある所である。それで物質的に見て無窮の天地を無限の萬物を、人は遠慮なしに悉く私有して居らぬのである。其の趣味を感じ價値を認むる狭き一局部に城壁を築き、門戸を閉ぢ、而して其の内に屏息して居るのである。此の城壁の範圍丈が彼の精神的に生活して居る所である。夫れより以外には、彼の物質的呼吸は通つて居るが、精神的呼吸の路は絶えて居るのである。それで物質的世界は廣くとも、精神的世界は狭いと言へる。物質的生命は強くとも、精神的生命は弱いと言へる。自己存在の意義は精神的世界に於て、

精神的生命を味ふ時に於てのみ感せらるゝのである。而して其の精神的生命の因りて發生する心的根本を余は活元と名づけて居る。本來活元は唯一である。物質的世界の或る一局部が其の靈動に觸るゝ時、其の觸れたる局部には乍ちにして光明を發す。其の光明が即ち精神的生命である、趣味である、價値である、故に活元の靈動は恰も情念類化の如くである。愛の心を以て人を見よ。瘡痕も笑靨の如く見ゆるのである。得意の時街頭に立て。途上の人は悉く自分を歓迎するが如く見ゆるのである。余の友人に日露戦争の時旅順攻撃に参加したものがあつた。歩哨に立つて、一寸の油斷もせず、近寄る人を誰何しつゝあつた一日の事である。本隊より使者來りて、一時休戦するにより、一定時間の間、平時の積りになりて縦に休息せよとの命令を傳へて去つた。其の時、友人は彼の地に着して以來、油斷なく凝した戦争の眼を、一時に休めて旅順の山水を見た。旅順

の山水は前からある。彼は日々之を見て居つた。然るに休戦の命令を受けざる前に彼の見たる旅順の山水は暗愁を帯びて見えた。此の時彼の見たる山水は非常に美麗に見えた、彼を迎へて笑ふが如く見えた。彼は斯くまで美麗なる山水が、何故是れまで暗愁を帯びて見えたかを驚いたのである。旅順の山水其物には何の變りもない。併し之を見る人の情念に變りがある。それで暗愁に見えたり、美麗にして笑ふが如く見えたりするのである。是れが即ち情念の類化である。活元の靈動も亦此の如くである。物質的世界には本來光明がない。活元の靈動が之に觸るゝ時、其觸れたる所に光明が現はるゝのである。金錢に觸るゝ時、金錢に興味が出る。名譽に觸るゝ時、名譽に價值が出る。知己を得る時、其心が活元に觸れる。それで知己が生命となる。對象の何たるやを問はぬ。趣味のある所、價值のある所、生命のある所、孰れ活元の靈動によらぬものはない。活元は生

命の原理である。

古來聖者は金錢を賤しとし、名譽を汚れりと言ふ。併し人間が此の世界に生存して居る以上、孰れかの物に付きて生命を意識せねばならぬのである。金錢に興味に感じ、名譽に價值を認めて、夫れで兎に角營々として何にかの仕事をやつて行く人は、唯ぼんやりとして物質的に呼吸して居る人よりも増しである。此の如き人でも、矢張世界の爲めに何にかの貢献をして行くのである。早い話が此の頃宗教家が何かにつけて慈善事業を起し、頻りと寄附金を募つて居る。而して其の寄附者の内で、金錢に興味を感じて之を貯蓄したる富豪が、名譽の爲めに其の多くを寄附することもある様である。寄附を募る人が名譽金錢を下品と蔑みたる多くの聖者を出したる宗教の信者で、而して之に應ずる人が名利の崇拜者である。募る方では、名利の崇拜者の金錢は不淨であるから之を貰はぬと言はぬ。矢張多額

の金子を出しさへすれば、其の人を有り難く思ふ。名利を捨て、粥を喫り。赤帽を被り、太鼓を撲ちながら市中を徘徊する書生よりも豪い人、大切なる人と持て囃される。而して慈善事業が出来る。人は何處までも苦い時の神を頼むものである。自身と関係なき間は、あの下等な奴と名利の崇拜者を罵詈する。併し其の人の寄附を仰かねばならぬことになる。是非共貴方の御盡力を仰かねばと来る。此んな工合で世界が動く。それで名利の崇拜者でもそんなに輕蔑するものでない。矢張世界に何にかの仕事をやつて行くのである。進化の神は聖者よりも餘程腹が大きい。兎に角仕事をやつて行くものは、聖者の神經過敏に嫌がるものでも、無頓着に使つて行くのである。

併し聖者が名利の崇拜者を賤むにも亦一理がある。彼等は金銭と名譽とを世界に於ける唯一無二の生命と思つて居る。金銭の失はれたる時、名譽の無くなりたる時、最早此の世界は住むべき價值のない

所と思つて居る。此の所がいかぬ。天地は無窮で、萬物は無限である。此の天地萬物の斯々の部分が活元の靈動に觸れねばならぬと言ふ、定りたる約束はない。活元は其の何處にでも觸れ得る。而して其の觸れた所は、何處でも光明を發する。或る人にありては夫れが金銭に觸れた。夫れで金銭に興味が感せられた。或は人に於ては夫れが名譽に觸れた。夫れで名譽に價值が認められたのである。併し廣き世界に於て、唯金銭を名譽とばかりが活元に觸れるべき特權を有つて居るのではない。其の外何物でも活元に觸れ得るのである。夫れが星に觸るゝ時、其の閃光の内に神の靈現を見ることが出来る。夫れが葦に觸るゝ時、其の色香の上に愛の神祕を味ふことが出来る。露の置ける、霞の曳ける、森の立てる、川の流れる、小供の項、猫の額、おさんの頬、牛の涎。どんなものでも、活元に觸れて之を見る時、皆夫々の靈光を放つて住むに足るべき趣味と價值とを此の世

界に與へるのである。それで金錢や名譽に價值を認め、夫れが爲めに兎に角何事かをやつて行くのは、決して悪いことではあるまいが。併し金錢や名譽以外に、趣味もなく、價值もなき所と、此の世界を見くびるのは、甚だ狭い量見である。金錢には脚がある。名譽には羽がある。何時吾人を見捨て、去るかも知れぬ。若し此の如き動搖不定のものが、住むに足るべき趣味と價值とを此の世界に與ふべき唯一無二のものであるならば、此の世界は眞につまらぬ所である。一日も安堵して生活することの出来ぬ所である。金錢や名譽があつても無くても境遇が如何様に變遷しても、夫れ等には一向關係なくして常に活元の靈動に觸れるべき常恒不變の或るものを手にしたる時、其の時初めて此の世界が住むに足るべき不動の價值を具ふるのである。此の常恒不變の或るものを道と言ふのである。人にして一旦此の道を得たる時、初めて難境に處して動せざるの沈勇を得ること

が出来、自分の手にせる職業に付きて神聖の意義を認め樂んで此に従事して居ることが出来る、世界に於て自分ばかりが一番豪きもので、他人のすることは何んでも癢に障つてならぬと言ふ様な神經質的増上慢もなくなる、と言つて何でも他人のする事にばかり盲従して、自分の執るべき何の主義理想もなき卑屈者ともならぬ。白隠禪師の如きは良い手本である。禪師の御寺の門前に酒屋があつた。其の家の娘が夫も無いに子を孕んだのである。夫れを親に責められた時、娘は返答に窮して「實は白隠さんの種だ」と言つたのである。此を聞いて怒るまいとか、父親は御寺へどなり込んで、散々和尚に悪口難言したのである。其の時、禪師は唯「あゝ、左様か」と言つて、若干の養育料を與へたのである。併し後に至りて、娘の言つた事は全く虚偽であることが知れた。父親は二度びつくりして、禪師の許に行つて、平身低頭して謝罪した。其の時禪師は相變らず「あゝ、左様

かと言はれ切りであつた。なんと偉大なるあゝ、左様かではないか。道を得た人でなくては、此れ丈の度胸が据らぬ。平氣で死する度胸を興へるばかりが道の能でない、平氣で死なずに居る度胸を興ふることも亦道の能である。而して此の道を傳へるものが宗教である。それで宗教は一種の處世術である。唯通常の處世術は脚のある金銭や羽のある名譽を得て動搖不定の生命を樂むことより成る。然るに宗教の處世術に至りては、常恒不變の或るものを得て、夫れによりて常恒不變の生命に樂むことより成るのである。併し宗教としての處世術と通常の處世術との間には確然明確なる境界線を引くことが出来ぬ。吾人の居る境遇は種々様々に變化する。併し此の境遇は如何程變化しても、之を固く握つて夫れに活元を結び付けて置きさへすれば、夫れで如何程困難なる場合でも何の造作もなくすらくと通り抜けて行くことの出来るべき常恒不變の或るも

のがありとして、夫れを吾人は道即ち宗教としての處世法と申すのである。然るに名利崇拜の處世法は此の如き處世法と相距ること最も遠い。故に名利崇拜は宗教としての處世法ではない。然るに名利崇拜の處世法と宗教としての處世法との間には多數の處世法がある。義務の觀念に生命を感じ、之れによりて一身を處するが如きは、名利崇拜に比して餘程多種多様の難關を切り抜けることが出来る。併し義理と人情との衝突と言ふ場合があつて、單純なる義務の思想丈では、一寸通過するものが六ヶしい。古來此の難關で困つたものが無數にある。「死るを忠義と言ふとは、何時の世からの習はしぞと言ふ愚痴は、凝り固まりたる鐵石心の政岡の口からでさへ出る。「忠ならんと欲すれば孝ならず。孝ならんと欲すれば忠ならず」とは、平家の賢人重盛が忠孝の板挟みに責められて進退谷まりたる時の嘆聲である。或は個人主義と言ひ、或は社會主義と言ひ、或は國家主義と言

ふ。一面から見れば結局處世法にすぎぬと言へる。其の各自は孰れも他の處世法で通過することの出來ざる難關を通過するの特色を有つて居る。同時に自ら通過することの出來ざる難關に會ふことも屢ある。それで世には多數の處世法がある。或るものは少數の難關を通過することが出來、或るものは多數の難關を通過することの出來る、而して益多數の難關を無事に通過すること出來るに従つて、處世法は益優良のものと言はるゝのである。若し何人にも之を守つて居りさへすれば、それで如何なる難關でも無事に通過することが出來る常恒不變なる或るものありとすれば、夫れが絶對的に優良なる處世法であらう。而して宗教の説く道は此の絶對的優良の處世法であらう。少くとも之を以て自ら期して居るのであらう。

併し、斯く宗教は有らゆる一切の難關を無事に通過することの出來るべき常恒不變の道を期して居るけれども、此の道を能く握ること

は中々困難である。それは斯う言ふ理由による。蓋し世には種々様々の困難がある。人は一人で以て世に有りと有らゆるものの困難を悉く経験すると言ふ事は先づ無いと言つて宜い。大抵の人は、皆多數の困難の内の或るものを経験する丈で、他の種類の困難に付きては一向知らぬのである。夫れは人々の困難は幾分かづゝ其の種類を異にして居る。先づ人々の居る境遇が違ふ。境遇が違ふと、困難の種類が違ふ。同一の境遇にあつても、性情が違へば困難の種類も違ふ。貧乏して居つて、之を苦にする者と、苦にせざる者とある。名譽を傷けられして、之を苦にする者と、苦にせざる者とある。詰り困難の種類は境遇と性情との區別で種々に違ふ。然るに本來宗教は一定の性情を具へたる宗祖が一定の境遇にありて、一定の困難に遭遇し、之を通過する爲めに得たる所の道である。即ち宗祖が自分の経験する一定の困難を通過する爲めに得たものであつて、他人の困

難を救ふ爲めに出来たものでない。勿論宗祖が一旦自分の困難を救ひ得た以上は、其の道を他人にも傳へて他人を救はうとするのであるが、夫れは後のことで、其の元の起りは自分の経験したる困難を救ふとにあるのである。現今の宗教家の内には、自分自身を救ひ得ずして、唯他人ばかりを救はうとする者が多くあるが、此の如き高尚なる純利他的行動は、古の宗祖には無かつたらしい。先づ自分自身を救つて、然る後他人を救ふと言ふが、宗祖の行はれた順序である。宗祖の性情は一定して居る。其の居られた境遇が一定して居る。従つて其の経験せられた困難が一定種類のものである。そこで其の宗教は此の一定種類の難關を通過するには最も都合よく出来て居る道ではあるが、此と全く種類の異りたる難關を通過するには一寸工合が悪い。死んで行く先きの事ばかりを苦の種として、現在の世の中を眼中に置かざりし宗祖が右の困難を救ふ爲めに得たる道は、宗

祖が夢にだも経験せざりし失戀の苦悶に惱める青年者を救ふには一寸間に合ひ兼ねる。尤も失戀の如きは何んだ、夫れよりも死んで行く先きの事が苦悶でないやと言はれて、夫れで青年者が成る程と思へば、夫れから來世本位の道が此青年者を救ふに役立つ。併し青年が自分は後世の事に付きては何んとも思はぬと言へば、夫れ切りである。それで宗教は之を開いた宗祖の個人的困難によりて着色されたる個人的形體を具へて居る。同じ來世本位の宗教でも、同一難關を切り抜けるに於ける宗祖の個人的技倆の差別によりて異りたる個人的形體を具へて來る。こんな風で宗祖の経験したる困難の異なるに従つて、又同じ困難を切り抜けたる宗祖の技倆の異なるに従つて、種々様々に異りたる個人的着色を具へた多數の宗教が出来る。後世の人々は其の遺遇する困難の種類に従つて又其の技倆の異なるに従つて自分に適する孰れかの宗教を奉じて其の信者となる。甲教の

將來歸依
者の多か
るべき宗
教

信者は自分の信する宗教が此世界で一番良き宗教で、他の宗教は間違つて居ると思ふけれども、夫れは乙教の信者に於ても、丙教の信者に於ても同様である。詰り一定個人の遭遇する具體的困難を、其の固有の精神能力を以てして無事に通過せしむる所の宗教が、其の人に取つて最も良き宗教である。此の如き個人的着色を具へたる多数の宗教の内、如何なるものが將來多数信者の歸依を得るかと言ふに、夫れは次の條件で定むと思ふ。

第一、宗祖の遭遇せる困難が普遍的のもので、同時に痛切のものであるに從つて、其の宗教が多数の信者を得るのである。換言すれば、宗祖の受けたる困難が種々の時代を通じ様々の人間を通じて遭遇されねばならぬ種類のもので、同時に夫れが人生に於て輕視することの出来ぬ重大なる性質のものであるに從つて、此の宗祖によりて立てられたる宗教は多数の信者を得るのである。來世本位の宗教が世

界に於て最大多数の信者を得て居る所以のものは、全く死んで行く先きに關する心配は種々の時代を通じ、様々の人間を通じて普遍的のもので、而して夫れが中々痛切のものであるが爲である。併し若し此の心配が人心を支配すること弱くなることがあるならば、其の時より來世本位の宗教が信者を失ひ行くのである。現に現今青年者の大多数の煩悶は死んで行く先きの事に關する煩悶でなくして現在の此の世に一身を處する上に關する煩悶である。來世的煩悶でなくして現代的煩悶である。それで現今の青年者を救済するものは來世を本位とする來世教でなくして、現世を本位とする現世教でなくてはならぬ。來世本位の宗教は隱居でもして、此の世の中の活動の縁の遠くなつた老人には適用するであらうけれども、是より活動世界に躍り出で、何にかの仕事をなさんとする青年者の煩悶を救済する上には一向役に立たぬ。尤も現世と來世との間に因果應報上の

如何なる
宗教が
青年に
足るか
を救ふ

連絡を附ければ、來世教でも理論上青年者の現世的煩悶を慰め得べきであるが、併し此の因果應報の觀念が青年者の人格を支配するに足る程強く彼等によりて受け取られるかどうか、餘程疑はしいのである。此の觀念が現今の教育を受けたる青年者の上に及ぼす影響は甚だ薄弱であると思ふ。此の如く纖弱にして迂遠なる關係を來世と現世との間に附けて、而して青年者の現世的煩悶を救濟せんとするよりも、もつと短刀直入的に現世的煩悶を救濟する宗教の方が現今の青年者に適當するであらう。古來淨土眞宗が隱居ばかりを支配して、有爲の青年者間に勢力の少なかつたのは、來世を本位とした結果であらう。然るに近來に於ける同宗の有力なる少壯布教家の説教や演説は一般に現世的である。來世を全く説かぬと申すのでない。假令來世を説いても、其の方は背景に隠して居つて、現世的煩悶の救濟に關する方が表面に強く現はれて、聽者の注意を動かして居る

と言ふのである。同宗教が青年者の間に勢力を有する様になつて來たのは、全く右の現世的布教の結果であると信ずる。青年宗教信者の信仰告白を讀んで見るに、家庭の不和、財政困難、家族朋友等の死による悲哀、自分の位置職業に對する不平、病氣による苦痛、學業の失敗、失戀による失望等による煩悶を遁れんが爲めに宗教に志したりと言ふものは非常に多くあるけれども、死んで行く先の事が心配であるから宗教を信ずるに至つたと言ふものは極めて少いのである。即ち大多數の場合に付きて論ずれば青年信者が宗教を喜ぶ様になる原因は來世的煩悶を逃れんとするにあらざして、現世的煩悶を逃れんとすることゝ明白である。現在の眞宗が現世的方面に於て青年の間に勢力を得つゝあることが解る。現在に於て然るのみならず、將來に於ては益現世本位となるであらう、又ならねばならぬのである。別段大した困難にも出會はずして世間的生存を

通過し來り、家督を子息に譲りて自らは樂隱居の身となり、死んで行く先きの事に關しての外、何等の心配もなき老人に取りては來世本位の宗教で澤山であらう。併し來世の事は佛様に委せるとして現に此の世に生存することに關する苦痛はどうして下さるかと言問すべき青年に對しては現世本位でなくてはならぬ。將來生存競争の激烈となるに従つて、右の如く詰問する青年が愈多くなるに極つて居る。だから、將來に於ては宗教は益現世本位とならねばならぬ。來世本位を以て宗教の骨子と考へて居る人々は、現世本位の宗教を以て下品なる宗教であるとか、或は宗教の眞髓を得ぬものであるとか言ふ様に感ずるかも知れぬが、自分はそんな馬鹿な事はないと思ふ。併し上品か下品か、そんな論は抜きにして、兎に角自分は現世本位の宗教即ち現世教が將來を支配する様になる事を確信して豫言し置くのである。尤も現世本位の宗教と言つても、來世の事を放擲せよ

近頃勢力
を得來り
たる天理
教

と言ふのではない。現世教にても、來世を説いて大に良きことと思ふ。唯風波荒き此の世界に生存し居る間は、其の境遇の變遷如何に拘らず、常に安堵して一生涯を送ることの出来るやうに精神的生命を與へることを以て將來の宗教の第一の勤めとすべきであると言ふのである。

近頃新に獨立の許可を得て、海嘯の押し寄するが如き勢にて社會の一部を風靡しつつある夫の天理教は純然たる現世教である。併し余の所謂現世教が此の天理教によりて最も良く代表されて居ると思はれては困る。余の理想とする現世教は金錢があればある儘で此の世に安住し、無ければ無き儘で安住し、名譽があればある儘で安住し、無ければ無き儘で安住し、健康なれば健康の儘で安住し、病氣なれば病氣の儘で安住し得る精神的生命を與ふべき常恒不變の道を教へる宗教のとである。然るに天理教は多數の現世的煩悶の中にて疾病

を眼目に置ける現世教であるらしい。而も疾病あるものには疾病ある儘にて其境に安住するの生命を與ふるのでなくして、正に其の疾病を治療するの道を傳ふるの現世教である。それで現世には相違ないが、余の理想とする現世教とは餘程範圍が異つて居る。天理教の布教師等は何と言ふか知らぬが、兎に角天理教の民間に勢力ある所以は、全く疾病を治療することに於て卓越する所にあると信ずるのである。笠森稻荷の如きあやしげなるものでさへ、笠森が徹守に音の通ふ所から花柳界に多數の信者を得て居る。況んや精神の持ち方によりて疾病を治すと言ふ、確實なる心理學的事實の上に立てる天理教のことであるから、猛烈なる勢力を以て一部の人間を支配して居ることは當然の事である。現世的煩悶の僅に一片にすぎざる疾病を確實に治療する丈のことで、天理教が此の如き大勢力を得て居るのである。若し現世的煩悶全體を確實に救済する理想的現世教があつ

たならば、其の勢力は如何程であるか測知することが出来ぬであらう。天理教は余の理想とする現世教ではないが、兎に角現世教が將來に於て勢力を有するに至るべきことは、天理教の現状によりてト知することが出来ると思ふ。

天理教が社會上に勢力を得べき第二の條件は、宗祖によりて傳へられたる困難を切り抜けるの方法が通常人により模倣し易き種類のものたる事である。宗祖が其の遭遇せる困難を切り抜けることに於て如何程完全であつても、若し其の方法が甚だ六ヶ敷しく、通常人によりて模倣出来ざるものなる時は、其の宗教は世間に勢力を得ぬのである。父母妻子と恩愛の情を絶ちて深山に入り、樹皮を衣とし草葉を食し、露地に住し荆棘に臥し、寒中水に浴し暑中火に事へ、此の如く嚴厲峻酷なる難行苦行を積んで道を得たるものあらば、吾人は其の壯烈なる行爲を偉として感服するのである。併し此の如きの道は餘

り壯烈に過ぎて通常人の模倣するに堪へざる所である。此の如くせざれば道を得ること出来ずとせば其の道は社會の内甚だ狭き部分の人の用ふべき道であつて、一般人の爲め役に立たざる道である。通常の社會的生活を營む人には應用出来ざる道である。社會を支配すべき宗教は社會的生活を營む人に應用すべき道を傳ふるものでなくてはならぬ。社會的生活を營まんが爲めには、人は父母を父母として之に孝事せねばならぬ、妻子は妻子として之を愛養せねばならぬ、他人の厄介とならぬ様に一家族を支へる丈の財産を持たねばならぬ、夫れが爲めに職業を持たねばならぬ、夫れが爲め學問もせねばならぬ、身體も健康でなくてはならぬ。國民としての義務、世間との交際、此等も忽にしてはならぬ。此等が社會的生活の要素である。之を放棄せねば得られぬ様な道は、通常人の得べからざる道である。又得なくても宜い道である。

難行苦行を積んで道を得たる行者は社會的生活の内に住んで居るものを俗人と言つて侮る、無能無力のものと云つて笑ふ。彼の眼から見れば、いかさま左様であらう。併し行者の方でそんなに言へば、吾々俗人の方にも言ひ分がある一體行者は人間存在の意義を何と心得て居るか。吾人を以て之を見れば、人間は無限に向上する。一個人は生々無斷なる向上的活動の應境的顯現である。過去無限の向上と、未來無限の向上との間を連續する鍵である。過去無限の向上の成果を一身に受け取り、之に自分の個人的向上を添加し、而して之を併せて自分に直接せる未來個人に傳へるべき運命を擔つて過去無限と未來無限との間に位置して我は此の現在に立つて居るのである。其の生るゝや向上の爲めである。其の生活するや向上の爲めである。其の死するや向上の爲めである。水の泡の意義もなく生じて意義もなく消ゆるが如く、人間の存在はそんなに無意義のものでない一定

の境遇に於いて一定の能力を以て生れたる人は、其の境遇と其の能力とに應じたる職業に従事すべき運命を持つて居るのである。貿易商たると下駄屋たるとを問はぬ。斯くて従事されたる職業は各自の天職である。此の天職に神聖の意義を認めて、眞面目に之れに従事して居るのが社會的生活を營む人の道である。吾々俗人は此の俗人の道を踏んで行く其内に人間存在の意義を認むるを以て宗教的生活とすることを要するのである。敢て妻子を捨ててに及ばぬ、敢て職業を厭ふに及ばぬ、敢て山の奥に籠るに及ばぬ、敢て林の間に隠るゝに及ばぬ。俗人的生活其の儘の内に宗教的生活を認めることを要するのである。然るに所謂聖者は宗教的生活と言ふ一種の生活を俗人的生活以外に立て、此の兩生活を根本的に兩立せざるものゝ様に思つて居る。宗教的生活を送らんとせば俗人的生活を遁れねばならぬ、俗人的生活を營まんとすれば宗教的生活を捨てねばならぬと思つて

居る。甚だしき不心得である。宗教的生活と俗人的生活との關係は恰も道德的生活と日常的生活との關係の如くならねばならぬ。世の中には大工とか、左官とか、教員とか、醫師とか言ふ職業はある。併し道德と言ふ職業は何處にもない。大工として、左官として、教員として、醫師として日常の生活を營み行く内に、道德的生活が行はれて居るのである。日常生活の内に道德的生活がある。日常生活を捨て、道德的生活を營むことが出来ぬ。宗教的生活と俗人的生活との關係も此の如くありたいものである。若し妻子を捨て、財産を抛ち、職業を廢し、日夕念佛を唱へたり、アーメンと祈ることが宗教的生活とすれば、此の如き生活を眞面目に送る爲めには、是非共俗人的生活を遁れねばならぬこととなる。俗人的生活をやる爲めには宗教的生活を捨てねばならぬ。若し此の如きものが宗教的生活ならば、吾々俗人は、此の宗教的生活を偏狭なる杓子定規の生活

として排斥するのである。吾人の要する宗教は、渴しては飲み、飢ゑては食し、父母に事へ、妻子を養ひ、職業に従事し、世間と交際するが如き、極めて平凡なる俗的生活の内に神聖の意味を興へて、人をして眞面目之に對せしめるとの出来る宗教である。而も一旦失脚一轉して軒軻落魄の境に陥るに至つたならば、其の失敗の生活を人力上の或る者（例へば天命の如きもの）に歸して、其の境に安堵せしむるの大度胸を興へる宗教である。人生を眞面目に觀するものは、失敗の時に天を怨み人を怨みて愚癡をこぼすと、屈原の如くなるが常である。人生を人力以上に歸するものは、眞面目に職業を營ますして、放縱的生活の内に一生を送ると、莊子の如くなるが常である。吾人の理想とする所は、眞面目に生活して、而も之に執着せぬところである。成敗を人力以上に歸して、而も眞面目に生活することである。無執着と眞面目とは水火相容れざるが如く見えて、而も達人の心中

に於ては能く調和し居るから妙である。盡人事待天命と申されたる大聖孔子の心中に於ては、慥に此の兩者が調和して居つたのである。此所が俗人的生活の理想で、而して其内に宗教的生活が行はれて居るのである。宗教的生活を營む爲めには俗人的生活を捨てねばならぬ様に考へて居る宗教家は、人生を二枚に考へて居るのである。人生を二枚に考へる宗教は小乘的宗教である。大乘的宗教に於ては、宗教的生活と俗人的生活とは一枚である。吾々俗人の要する宗教は俗人的生活其の物の内に宗教的生活を認むる宗俗一枚の大乘的宗教である。無論今日に於て、世を遁れて山寺なぞに入り込んで、祈禱三昧に耽ることを以て理想の宗教的生活と思ふ程、夫れ程宗教的生活と俗人的生活とを離して考へる迷信者は甚だ少い様であるが、夫れでも尙此兩生活を兩立すべからざる二枚とする思想は随分強く世間を支配して居る様である。此頃、基督教界の一名士が日糖事件の爲

に拘引せられ、豫審に於て有罪と判決された。夫に付き、某新聞記者が同名士の留守宅を訪問した時、其の令息なる人が應對に出で、「初めは宗教家でこそあつたけれど、今は政治家でありますから、縦し今回の事件に有罪の宣告を受くとも、宗教界に些の影響をも爲さぬのでありましょう」と新聞記者に語つたことが新聞に見えて居る。此言説は政治家として立つ爲に宗教的生活を捨てたことを意味して居る。何の爲に宗教的生活を捨てたか。政治家的生活を營む爲に不都合であるからと解釋するより外はあるまい。大乘的宗教の見地より見れば、政治家としての行動其物の中に宗教的生活を營むことが出来るのである。政治家として立つ爲めには捨てねばならぬ様なそんな窮屈な宗教ならば、最初から之を信せぬ方が宜いのである。宗教的生活と俗人的生活とを二枚に見る小乗的宗教を信じて居る者の常として能く斯んな小細工らしき言説を弄する者である。勿論彼は宗教

を汚さゞらんことを欲して斯の如き言説を述べたのであらう。併し斯る言説を吐きて、夫れで大に宗教を辯護した様に心得る所が、抑此小乗的宗教の心持を表示して居るのである。宗教家ぢやからとて過失が無いものと限らぬ。過つて罪を犯したならば、小細工的言説を弄して辯護するのを止めて、速に悔ひ改め行く所に宗教的真面目が存在するのではないか。幸にも彼の父が判官の前に立つて白状すること、神に對して懺悔するが如しとの事である。判官は父の誠意に感動したとの事である。果して然らば父は宗教家である。政治家となる爲めに宗教的生活を止めた人でない。罪はあつても一時の過失である。罪は罪として、尙自分は彼の宗教的真面目なる所に對して敬意を表するのである。父は此の如き人である。此の如き良き父子として何故に彼は「吾が父も宗教家たる以上、罪あらば速に白狀して悔ひ改めて貰ひ度い」と言はずして、淺間しくも政治家であるから、

今回の事で有罪となつても、宗教界には毫も影響せぬなんてことを言ふのであらう。併し自分は敢て深く追窮せぬ。唯自分が彼の言葉の端を捕へて斯の如く喋々する所以のものは、會彼の言葉が宗教的生活と俗的生活とを全く兩立出來ざるものと、眞面目に考へて居る多數の小乘的聖者の心持を能く表はして居るが爲めである。此の如き聖者は自分に與へられたる社會的境遇を厭ひ遁れて山寺や教會に入り込み、而して社會生活の爲めに各自の職業を天職と信じて眞面目之に従事しつゝある人を俗人だのなんのと眼下に見下して、自分は宗教家に候と高くすましてゐる。實に失敬極まる言分である。俗人の俗の一字に神聖の意義が籠る。天職を重んじて波風荒き世間に住する俗人となるが能か、此の世間を嫌厭して山林の間に行者となるが能か。野末に咲ける無名の花でさへ天に向つて開く丈の抱負を持つ。境遇が煩累なればとて自分に具つたものなら之を厭ひ逃げもせず、能力が弱小なればとて他人を羨み嫉みもせず、此の境遇と此の

能力とに相當する職業を見出し、之を自己の天職と思ひ眞面目之に従事する事に於て、吾々俗人は無上の光榮を自覺するのである。世には唯感心して見た丈にて、之を模倣するに及ばぬものが多くある。網渡りは夫れである。輕業師の網渡りするや、感心して見るに足る。併し唯感心して見た丈で澤山である。之を模倣するには及ばぬ。大道がある。夫れを歩行すれば用向が達せられる。仙人的聖者の難行苦行は輕業師の網渡りの如きものである。俗人は感心して之を見て居る。併し吾々の歩むべき所は社會的大道である。世を支配すべき宗教は此社會的大道と調和する所の俗人的宗教でなくてはならぬ。佛祖は肉食妻帯を僧侶に禁じられたのである。併し此の禁令は古來大多數の僧侶によりて破られて居る。余は之を破る僧侶を咎むよりも、寧ろ斯る仙人的禁令を發したる教祖が無理であると思ふ。尤も佛教は仙人的聖者を作るを目的とするもので、俗人の間に勢力ある

となきとを問はずと言は、夫れまでの事であるが、俗人世界に勢力を得ようと思ふならば、肉食妻帯の禁令を犯す破戒僧があつても、之を黙許して置かねばならぬ。現に古も今も黙許されて居るのである。併し經典の上で肉食妻帯を禁じて置きながら、實際の上で之を黙許する程精神教化の道に取りて有害なる者はない。兒童を我儘者にする上に於て最も有力なる教育的過失は、猥りに禁令を發して置きながら、其の行はれざるを見るに及びて之を黙許することである。世上の父母は斯る過失によりて自ら兒童を我儘者に育て置きながら、其の我儘を兒童の性質に歸し、而して自分自身の非を悟らぬのである。苟も禁令を出し居る以上は之を厲行せねばならぬ。若し之を破りても黙許せねばならぬ程の實行し難き禁令ならば、斷然之を撤回するを以て上策とするのである。そこへ行くと親慈聖人は實に蒙い。往生の一事は他力の信にあり、妻ある身に法衣を纏ひ、肉を食せる

口に念佛を唱へても、若し他力の信心にして決定する上は、煩惱具足の其の儘にて無上涅槃に入ること夢々疑ひなしと破破して、内實は兎に角、表面上歷々として傳へられたる三千年來の禁令を一時に撤回したる聖人の行爲は、佛教史上破天荒の大發見である。此の發見によりて、仙人的佛教が俗人的佛教となつた。佛教の勢力を社會上に扶殖する上に於て無上の事業である。宗教の社會的勢力に關する第三の條件は、其の傳ふる道が有ゆる一切の人に、通じて、有ゆる一切の種類の困難を切り抜ける上に應用せられ得る様に融通無碍の性質を具ふることである。是れは精神の經濟的要求上、甚だ大切なことである。經濟的要求とは守る所約にして應ずる所無限なるべきものを欲するものである。此の要求は精神活動の有ゆる方面に於て現はれて居る。先づ第一に、文明發展の上に大勢力を有して居る。哲學や科學が已に此の經濟的要求を遺憾なく現はして居る。哲學や科

學は單に個々の知識を蒐集することを目的として居るのでない。多数の現象を説明することを真正の目的として居るのである。天地間の現象は複雑多端にして端倪すべからざるものである。支離滅裂にして捕捉すべからざるものである。此の如き現象を悉く記憶することは、限りある能力の吾人に取りて、到底不可能の事である。併し此の變化限りなき現象相互間には自ら共通一貫する所の一致點がある。此の一致點を捕へ、之によりて夫の現象を見れば、現象其物は依然として前と同様なれども、之を見る吾人の精神状態に於て甚しき相違を來すのである。即ち先きに複雑多端にして端倪すべからざりしものも、甚だ簡單なる形式の内に組み入れられて見える。支離滅裂にして捕捉すべからざりしものも、甚だ親密なる關係を以て連絡するものとなつて見える。斯く複雑多端なるものを簡單なる形式の内に組み入れ、支離滅裂なるものを親密なる關係によりて結び付ける

ことを説明すると云ふのである。而して此の説明は現象相互間に共通一貫する一致點の思想によりて出來たのである。此の一致點の思想を原理と言ふのである。説明は原理によりて出来る。説明を眞の目的とする哲學科學はやがて原理を得ることを目的として居る。吾人が一たび此の原理を掌中に握る時複雑多端なるものでも、支離滅裂なるものでも、悉く之を掌中に握つた様な氣がする。吾人は變化限りなき現象を悉く記憶することは出來ぬけれども、其の原理を捕へることによりて、悉く之を記憶したるが如き權利を以て凡ての現象を支配することが出来る。鼻を切り、耳を切り、手を切り、足を切り、脛を切れば、終に人は死ぬのである。併し唯心臟を刺した丈でも、矢張人の命が無くなるのである。原理を握りて一切の現象を支配するのは、恰も刀を心臟に擬して人の死活を支配する様なものである。守る所約にして、應ずる所が限りない。それで原理を握る

ことは知的方面に於て極めて經濟的要求に合して居る。宗教の道は、困難を切り抜ける方面に於て經濟的要求に合して居るを貴しとするのである。

人生には種々雑多の困難がある。甲の困難を切り抜けるには甲の道に因り、乙の困難を切り抜けるには乙の道により、丙の困難には丙の道を以て應じ、丁の困難には丁の道を以て接すと言ふ様に、困難の種類が多き程、之に對する道が、多くなければならぬならば、夫れでは甚だ繁雜に堪へぬのである。一の原理を握りて凡ての現象を説明するが此く、常恒不變なる一の道を守つて居りさへすれば、夫れに依て如何なる困難に遭遇しても、無事に之を通過することが出来る時、吾人は困難の方面に於て、一を守つて萬に應じて居るのである。原理は現象の説明に應用廣きに從つて其の位置を高める。道は困難の切抜けに應用廣きに從つて、之を應用し得る人の多きに從

つて、其の價値を増すのである。而して如何なる性情の人の如何なる種類の困難に對しても應用無限なる時、其の道は融通無碍の無上妙道と謂はれる。宗教の傳ふる道は此の如きものを理想とせねばならぬ。一を守つて萬に應ずる底のものでなければならぬ。故に前に今後の宗教は現世教でなくてはならぬと言つたのは唯比較上の談である。實は現世教で同時に未來教でなくてはならぬ。俗人教でなくてはならぬと言つたのは、唯比較上の談である。實は俗人教で同時に仙人教でなくてはならぬ。況して唯單に病氣の治療を目的とする様なそんな一小局部の困難を相手とする狭きものではないかぬ。斯の如きものは、如何程多數の信者を得て居つても、宗教としては甚た位置の低きものである。笠守稻荷の如きが、即ち夫れである。宗教としての品格は一を守つて萬に應ずる底の道を傳ふるに至つて最も高しと謂ふべしである。

併し宗教に對する右の要求は、理想として甚だ高尚なる註文ではあるが、實際に於ては甚だ難澁なる註文である。其の難澁なる所以は、宗教は凡て宗祖の個人的着色を免れざることにある。前にも言つた通り、孰れの宗教にも皆宗祖の個人的着色がある。科學の如きものならば、多數の研究者が共働的に研究したり、相互論争したりして、自然と出來上りて行くものであるから、個人的着色を有つて居らぬ。宗教も多數の學者が集合して、此れならば最も融通無碍であらうと言ふ所まで辯論したり討議したりして出來るものならば、個人的着色を有つて居らぬであらう。併し此の如くしては到底宗教と言ふものにならぬ。斯々の道を守りさへすれば、困難を無事に切り抜けることが出來る筈だと言ふのは、夫れは唯議論文で生きた證據がない。學者が集合して相談の結果として出來るものは、此の如きものにしては、此の如き者では通常の科學であつて、宗教でない。宗

教にはどうしても生きた證據が要る。生きた證據とは、我れ此の道によりて現に我が困難を切り抜けて此の如く茲に在りと言ふ事である。此の生きた證據を實現した人が即ち宗祖となるのである。夫れで斯々の道を守りさへすれば困難を切り抜けることが出來る筈だと言ふ人は、其の論ずる所に如何程の創見があつても、矢張宗祖たることを得ぬのである。現に困難を切り抜けて生きた證據を與へた人でなくては宗祖になれぬ。然るに宗祖は一定の情意を具へた人である。一定の知能を具へた人である。一定の國土に生れた人である。一定の時代思想の内に成長した人である。而して一定の具體的困難に遭遇した人である。従つて其の宗教は一定の個人的着色を免れぬ。従つて一部の人を救済するには能く適合すれども、他の部分の人には適合せぬと言ふことを免れぬ。無論宗祖の人格が大きく、其の知能が廣きに従つて其の宗教は愈應用の弘きものとなるには相違ない

が、夫れでも尙一定の國土、一定の時代思想、一定の具體的困難によりて規定されたる個人的着色を具へずには居れぬ。それで日蓮宗には日蓮聖人の個人的着色がある。親鸞聖人の個性に類似した人は淨土眞宗の信者となる。着色がある。親鸞聖人の個性に類似した人は淨土眞宗の信者となる。日蓮聖人の個性に類似した人は日蓮宗の信者となる。勿論日蓮宗と淨土眞宗との間に或る類似點があるに相違ない。併し此の如き類似點を發見して見た所が、其の觀念は唯抽象的のもので、説明上には便利のものであるが、一定の境遇に於て一定の困難に遭遇せる一定の個性の人の煩悶を救ふには餘りに稀薄迂遠であらう。若し此の如き抽象的類似の觀念によりて具體的困難を切り抜け得たる人ありとすれば、其の人は純粹觀念の團塊の如き人にて、感情や意志に於て何等の特色なき人であらう。此の如き人によりて開かれたる宗教は虚無恬淡宗と言ふ様なものとなつて現はるゝであらう。虚無恬淡宗

も可なりである。併し此の如き宗教は唯虚無恬淡的人を救ふには役に立つであらうが、情意の猛烈なる人の煩悶を救ふには役に立たぬのであらう。それで日蓮宗と淨土眞宗との類似點を發見して孰れにも偏せざる教理を付ければ、其の宗教が日蓮宗の信者も、淨土眞宗の信者も、合併して之を救済するから日蓮宗や淨土眞宗の差別的存在の必要がなくなるかと言ふに、決してそうは行かぬ。虚無恬淡宗は虚無恬淡の傾向ある一部の人を信者にする丈で、其他の情意強き人は、矢張其の個性上の差別に従つて或は日蓮宗に向ひ、或は淨土眞宗に赴くのである。して見ると、個人的着色を取り去つて何人にも應用出来る積りで開かれたる虚無恬淡宗は、矢張個人的着色を具へて居つて、此の着色に投合する種類の人丈を信者にするに歸着するのである。結局一定の宗教を立て、之で以て一切の人類を救済すると言ふのは、一切の人類の個性、境遇困難が凡て此の宗教の

結論

鑄型に當て嵌まる様に充分一致した曉に於て初めて出來得ること、然らざる限り、種々の個人的着色を具へた宗教が必要である。勿論之を放任して置けば、餘り個人的のものとなるの結果、種々雑多の迷信妄想を世上に流布するから、他方より純粹なる理性の超個人的批評を加へて其の弊を妨ぐの必要はあるが、さればとて學者の理想的要求の様に、有ゆる宗教を打つて一丸とすることは出來ぬであらう。若し學者が此の如き注文に合ふと思ふ宗教を自分で開くとしても、矢張其の宗教は一丸教と言ふものになつて了つて、結局夫の虚無恬淡教と同一の運命に歸すると信するのである。我が此の一丸教は理想的宗教である、之を信せざるの輩は愚者である、昧者であると絶叫して見た所が、此の愚者や昧者が無數群居蠢動して居る此の世界より外に、宗教を施すべき場所が無いのだから仕方がない。それで、詰り人々の個人的性情の異なると其の遭遇せる具體的困難の

異なるに従つて之を救済するに適當なる種々の個人的着色を具へたる種々の宗教が必要であると言ふ事に歸着する。其の中でも、比較的多数人に普通なるべき性情を圓滿に具へたる宗祖が、通常人に有り勝ちなる困難を比較的によく經驗して、而して社會的生存と矛盾せざる道によりて此等困難を無事に通過することによりて立てたる宗教が、比較的融通無碍の者となるのである。理性上の理想的要求に合ふ所の宗教的概念は、餘り個人的着色に傾くの結果として殘酷なる黨派的根性や、愚昧なる妄想的迷信に耽らんとする宗教に對して趙個人的批評を加へて、而して此等の弊害を除去する上に於て他に比類なき權威を備へて居るけれども、何等の個人的着色もなき其の儘の形式で、直に一切人類を支配すべき有力なる宗教になることは、唯望むべくして行はれぬことであらう。

如何なる
宗教が最
も我國民
に適する
か

國民が一個の團體組織となつて生活するには、彼等の心を修める所の宗教の如きものが必要であらうと思はる。けれども如何なる宗教が果して現時の日本國民の需用を満足せしむるか云ふことは、餘程大なる問題である。現今日本に存在する宗教及道德教を數ふれば、佛教、儒教、神道、基督教等が先づ重なるものであらうと思ふ。其中に於て基督教と佛教とは、世界的の宗教にして、其創立者の精神は世界中へ之を弘めやうとしたやうである。儒教は之も素より世界的と云へば言へないこともないであらうが、先づ之は支那の堯舜を本としたので、それに人道の考を調和したものと思はる。神道は又日本國民を本としたもので、他の宗教及道德教とは少し違ふかと

文學博士 元良勇次郎

國家の成
立と宗教
の成立

考へらるゝのである。では等の宗教及道德教の起りを考へて見るに、皆餘程其創立當時に於ては奮闘したもので、又或る場合には例へば基督教及佛教の如きは、其創立の國には行はれずして、却つて他國に弘がつたと云ふやうな實例から考へて見ると、國家の成立と宗教の成立とは必ずしも一致しないやうに考へらるゝ。故に國民に宗教が必要であるとしても、宗教的組織が國民的組織と一致するや否や、又歴史上に於ては確に一致して居ないけれども、將來は一致すべき筈であるかどうかと云ふやうなことは、今日の學識に於ては判断し兼ねることである。畢竟國家を組織する要素、例へば人種の異同、地理上の國境、統治者の異同等の事は國家組織上必要なことである。然るに宗教は、殊に基督教や佛教は人種に關係することなく、又統治者にも關係することなく、而も一種の信念の異同に依つて支配せらるゝのであるから、國家の成立とは事情が餘程違ふやうである。

併ながら世界的であるからと云ふて、必ずしも宗教が國家組織と矛盾する譯でもない。なせなれば學術文學其他社會一般の文明の如きは、現時の状態に於ては世界的にして人種の異同、地理上の國境の制限を受けずして、世界中に延蔓する傾向があるにも拘はらず國家組織と常に矛盾しないのみならず却て之を助けて居るからである。それ故に宗教も學理の彌蔓、文明思想の彌蔓等と均しく世界的に弘がると云ふとは敢て差支がないのみならず之を助けるであらうと思はれる。併ながら今日吾人の問題となる事は、現に日本に於て將來如何なるものが、國民の需用に適して、國民性を發達する上に貢獻するであらうか、是今日吾人の研究すべき重要な問題である。過去に發達した宗教の歴史を考へて見るに、今佛教の言葉を藉りて言へば、所謂破邪即ち其當時に行はれて居る邪説を破ると云ふことも必要である、同時に又顯正即ち自己の教理を押立て、行くと云ふ

ことも必要であつたので、之は佛教に於ても基督教に於ても同じことである。故に兎に角宗教と云ふものは其成立の當時に於ては、有ゆる學識學說等に對し抵抗すべき場合には抵抗し、又自己の説を立つべき所には説を立て、其當時の思想界を統御するだけの力があつたに違ひないと云ふことは、歴史の明に示して居ることである。然るに今日古代の宗教を多少其形を變じて、果して能く現時の思想界を壓服し、又彼等に満足を與ふことが出来るであらうかと云ふのが、此歴史的宗教に就いての大なる疑問である。素より歴史的宗教は人の心に永く浸込んであるのであるから、惰力に依つて數年かの間續くであらうと思はれるけれども、今日は科學も進歩し、人の一般の思想が大に變つて居るから、今後の人の思想を支配し、彼等に満足を與へ、社會の強大なる力となつて、國民の發展を導いて行くことは、二千年前に説かれた教の能くすることであらうか。若し果

基督教は
宇宙的宗教

して然りとすれば基督は何故にモーセ及其他の豫言者の教を祖述するに止めなかつたであらうか。釋迦も何故にブラマ教の宣教師として満足せなかつたであらうか。是等の點は今日吾人の大に考ふべきことである。二三年前には世上に豫言者の呼び聲も随分高かつたが今は火の消たやうになつて仕舞ふたのである。此れは世人が反應しないので豫言者先生失望したのであるか。若くは數人の同情を得て幾らか安心が出来たのであるか。何うかは知らぬが此れでは大豫言者が出さうにもない。今少し根のある大教育家が出なければならぬ。今暫く日本に現在存して居る歴史的宗教の各特質に就て考へて見やうと思ふ。基督教は其舊約全書の初めに於て、先づモーセの組織より始まり、此天地の造物主なる神を其本尊として崇拜する宗教である。尤も新約書にある神は昔のエホバとは餘程變つて來て居るけれども、やはり基督教は天地の造物主たる神を崇拜すると云ふのが其

佛教は心
理的宗教

特質である。それ故に若し假に之に名を付けるならば、基督教は宇宙的宗教であると云ふて宜しからうと考へるのである。でそれが基督教の他の宗教より最も違つて居る所であるやうに思はるゝ。次に佛教はどうであるかと云ふに、之は素より宇宙天體等の事を説かないではないけれども、然しそれ等の點は餘り佛教の長所でないので、殊に佛教の骨髓となつて居るのは、内省によりて得たる心理學上の研究であるやうに思はれる。故に例へば此地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天人等の世界を分けて、さうしてそれに輪廻すると云ふやうなことも全く精神上の事を説いたもので、所謂心理學の研究題目となるべき事柄である。又佛菩薩等が他の衆生と異つて居る所は何であるかと云ふに、是又其心思状態の違ひである。殊に之を心理學的に説明したのである。さう云ふ點から考へれば佛教は心理學的宗教と言ふて宜しからうと思はれる。又儒教や神道は國家的社會的の方

神儒二教
社會的宗教

將來の宗教

面に發達して居ることが殊に他の宗教等と違つて居るので、社會及國家を本位として立てた教のやうに思はれる、と云ふやうに各其特色がある。其特色があつて、而も古代に於ては大に他と争ふて今日迄適者生存の理に依つて續いて來たことであらうと思はれる。さう云ふ違つたる方面を代表した宗教や道德教が、今日我國に存在して居るのである。のみならず今日は過去二三百年来科學が大に進歩して、古人の考へ及ばなかつた所の事柄が、科學上説明せらるゝやうになつて來て居る。それ故に假に四の教が連合したとしても、其内には今日の科學思想を含んで居ないから、現時の進歩した人の思想を能く支配することは困難であるまいかと考へらるゝのである。故に將來の宗教及道德教に於ては、其科學思想を包含して、さうして以上述べたる國家社會的の方面、宇宙的の方面、心理學的の方面等を網羅した者でなければならぬであらうと考へらるゝのである。

素より斯の如き事は言ふべくして行ふべからざる事であると言へばさうも言はれるであらうが、併し若しそれなれば將來の倫理及宗教と云ふとに就いて、全く口を塞いで居る方が適當であらうと考へらるゝ。若し將來の事に就いての望を言へば、其果して總て實行せらるゝや否やと云ふことは先づ第二として、兎に角將來に斯くあるべし、又斯くありたいものであると云ふやうに言はねばならぬのである。故に今直に之を實行することは困難であるとは分つて居るけれども上の事を述べて偉人の出現を待つのである。

將來の宗教には神佛等の名は漸々減するであらうと思はれる。さうして所謂精神修養の或る教理教則が現時の宗教及道德教の位地を取るやうになるであらうと考へらるゝ。例へば醫學衛生學に於ては身體の健康及病氣の治療法を論ずると同じやうに、將來の倫理及宗教は精神の醫學又衛生學のやうなものであらうと思ふ。故に今日現に

存在して居るものに依つて考へて見れば、先づ禪の修養法の如きが之に近いかと思はるゝ。なせなれば禪は殊更に信念と云ふものを用ひず、全く精神を修養するのが其目的である様に思ふからである。けれども將來禪學を以て直に總ての精神修養に代へやうと云ふのではない。禪の如きも大に貢献するであらうが、兎に角心理學の方面より、倫理學の方面より、社會學の方面より、宇宙進化の方面より總ての勢力を一點に集中して、精神修養の方法たる教理を造り出して、精神の衛生を試むると云ふのが、是が將來の宗教で、さう云ふ倫理及宗教なれば國民生活に先づ必要なもので、又缺くべからざるものであらうと思ふのである。

文學博士 井上哲次郎

宗教と道徳
對新に對する

宗教と道徳との關係は我國に於ける教育上の一大問題でありまして、之に付て心を苦しめて居る者は少くないとであらうと考へます。それと云ふは地方の教育雜誌などを覽て見ると此問題に付て見解を述べて居る者が色々あるやうであります。中には相互の意見を戦はして居ると云ふやうなこともあります。それで此問題に付て更に吾々の考を明かにして置きたいのであります。尤も此問題に付ては或は演説に、或は著述に度々述べたともありますが、段々教育上の實際に照らして考へて見ると、新に又感ずる所が種々あるのであります。それで先づ宗教と云ふものに對して如何なる態度を取るべきかと言

へば、茲に宗教に對して二種の相反したる見解があるのであります。世の宗教家抔は教育上には宗教を入れんければならぬ、殊に道德抔と云ふとは宗教に頼るで無ければ決して十分なる効果を顯はすことが出来ないと思つて居る、ソコで教育界に向て盛に宗教の必要を唱道する有様であります。

之に反して宗教など云ふものは決して要らないと云ふ一派があります、殊に唯物論者の如きは全然宗教を非定して、其の有害無益を公言して憚らないのであります。唯物論者で無くとも宗教の必要を認めない者が往々ありますので、單に國民道德を維持して往きさへすればそれで足りりであると斯う云ふ風に考へるのであります。熟々此の二種の見解に付て考へて見まするに、何方にもナカク強大なる理由があるやうに思はれます。併し我々の觀る所では、此の二種の見解と云ふものは眞理の一方面をのみ見て居るものと考へ

る。宗教を主張する者は佛教だの、基督教だの、さう云ふ從來の歴史的宗教の必要を唱へて來るのであります。さう云ふ宗教を必要として居る者もそれは無いではない、佛教なり、基督教なり、さう云ふ宗教が各々一種の機關を有して、それ／＼勢力を爲して居ると云ふのは、やはりそれに依て精神の慰安を得て居る者があるからであります。併しながら宗教と云ふものは必ずしも佛教とか基督教とかさう云ふやうな特殊の歴史的宗教に限つた譯けでは無い、さう云ふ特殊の歴史的宗教に拘泥しないで、寧ろそれを全く離れて、さうして廣く宗教と云ふものを認めることが出来るのであります。此の廣く認めたる所の宗教から見れば、佛教だの基督教だのと云ふものは、或る時代に發展した所の特殊の宗教の形式であります、宗教はさう云ふ特殊の歴史的宗教よりもズット廣大なるものであります。さう云ふ廣大なる宗教が次第に社會の必要となつて來て居る、ソコで宗